『スラヴ研究』No. 53 (2006)

Ю. トゥイニャーノフの「文学史」再考

八　木　君　人

はじめに

ロシア・フォルマリズムへの関心は、ブームとまでは言えないものの、近年、再びロシア国内の研究者の間に強くあらわれているように思われる。2001 年には、フォルマリズム研究の古典ともいえる A.A. ハンゼン＝レーヴェ『ロシア・フォルマリズム：異化の原理からのその発展の方法論の再構成』が露訳され[1]、また НЛО (Новое литературное обозрение) № 50 (2001) 誌上では「知的可能性としての 1920 年代：フォルマリズムの地平において」と題される小特集が組まれているし、2002 年 12 月 18-20 日にモスクワ人文大学で行われた第 10 回ロトマン記念講演会の資料として編まれた『ロシアの理論：1920-30 年代』[2]に収められている報告の、14 本のうち 6 本がフォルマリズムに捧げられている。本論を執筆している 2005 年においては、単著として И. スヴェトリコヴァ『ロシア・フォルマリズムの源泉：心理主義の伝統とフォルマリズム学派』[3]が出版され、『文学の諸問題』9-10 月号においてはシクロフスキイに関する小特集が組まれ、НЛО № 71 では И. カリニン「分節性の芸術としての歴史（ロシア・フォルマリストたちの歴史的体験とメタ文学的実践）」が発表されている。また日本においても、現代的な視点からフォルマリズムを読解する試みとして、佐藤千登勢「シクロフスキイ再考の試み：散文における《複製技術的要素》について」（『スラヴ研究』52 号、2005 年）や、野中進「シクロフスキーにおける再認の概念」（日本ロシア文学会 2005 年度研究発表会における口頭発表、10 月 8-9 日、於早稲田大学）を挙げることができる。

これらロシア・フォルマリズムの「再考」のいくつかは、現代における人文学の危機と共に語られるわけであるが、その意味ではわれわれも問題意識を共有しているといえる。思うに、フォルマリズムのアクチュアリティを読むとするならば、彼らの理論詩学、彼らの実践＝散文や日記、そして彼らの「政治」という、少なくともこの三幅対を考えなければならない。それこそが、1920 年代後半から弾圧され、1960-70 年代に構造主義ブームと共に蘇生され、特に 80 年代の「伝説的な」『トゥイニャーノフ論集』において主にモスクワ＝タルトゥ学派の研究者によって「再発見」されたロシア・フォルマリズムを、現代において読む方法なのだろう。結果的に考えればフォルマリストたちは、彼らが共闘したといえる、広く「アヴァンギャルド」と呼ばれる芸術運動が 30 年代以降に蒙った「悲劇」を、

---

1 *Ханзен-Лёве Оге А.* Русский формализм: Методологическая реконструкция развития на основе принципа остранения. Пер. с нем. С. Ромашко. М.: Языки русской культуры, 2001.

2 *Зенкин С.* (сост. и отв. ред.) Русская теория: 1920－1930-е годы. Материалы 10-х Лотомановских чтений. М.: РГГУ, 2004.

3 *Светликова И.* Истоки русского формализма: Традиция психологизма и формальная школа. М.: Новое литературное обозрение, 2005.

同じようには体験していない。ここでは、近年の「アヴァンギャルド」研究においてなされた「断絶／継承」といった問題設定は無化される。そのとき、先の三幅対を念頭においてフォルマリストたちがとった、(現代にも通じる) ある種のシニシズムを提示することが可能となる。しかし、そのような試みを成す為にまず必要なのは、彼らの理論的著作を再び愚直に読み直すことではないだろうか。しかも、その再読のために本論が採ったのは、「文学史」という非常に限定された観点でしかなく、それ故、本論は試論の域に止まらざるを得ない。しかし、初期フォルマリズムの理論詩学に比べれば、先行研究が手薄な後期フォルマリズムの「文学史」を検討することは、それ自体として決して無駄ではないだろうし、また、現代の「再考」がしばしばフォルマリストたちにおける「歴史」を巡ってなされることを考慮すれば、意義のないことではないだろう。以下、本論の展開を予め提示しておく。

第一部ではフォルマリストたち[4]が内在的な作品研究から「文学史」の問題に目を向けていることを確認し、それが「ブィト」や「ファクト」といった「文学外」の要素を文学研究に取り入れるその方法論と密接に関係があることを指摘する[5]。Б. エイヘンバウムと B. シクロフスキイを検討しながら、前者は社会学化[6]することにより、後者は「異化」のメカニズムに依拠し続けることにより、文学史固有の時間を扱うことができないことを確認する。これは、「外部（／内部)」を如何に扱うかという問題に敷衍されるだろう。続いて、M. バフチンの歴史詩学、P. ヤコブソンの史的音韻論、それぞれにおける通時態／共時態の捉えられ方を確認する。これは、両者の理論における概念としての「エボリューション」を確認することによって、通時態が共時態を支えるのでも、共時態が動態であるのでもない、Ю. トゥイニャーノフによる通時態／共時態の乗り越えを提示するための前

4　「フォルマリスト」「フォルマリズム」という用語は、エイヘンバウムやヤコブソンも述べているように、彼ら自身が用いた言葉ではない（「まず、いかなる『形式的方法』も、もちろん、存在しない。誰がこの名称を考えついたのか再現するのは困難であるけれど、この名称の発案はあまり成功していない」（*Эйхенбаум Б.* Вокруг вопроса о «формалистах» // Печать и революция. 1924. № 5. С. 2.)、「《形式主義（フォルマリズム）》という曖昧で奇妙なレッテルは、言語の詩的機能についての分析を何でもかんでもみな非難してしまおうとする中傷家たちのはやらせたものなのだが、……」(R. ヤコブソン「詩学を求めて」T. トドロフ編、野村英夫訳『文学の理論：ロシア・フォルマリスト論集』理想社、1973年、8頁)。しかし、本論では煩雑さを避けるため、1910–30年ロシアにおける文学研究の運動を（括弧なしの）フォルマリズム、その担い手をフォルマリストと表記し、特にオポヤズの主要メンバーであったシクロフスキイ、エイヘンバウム、トゥイニャーノフの三人及び彼らの活動を示す。また、一般的に流通するネガティブな意味を示す場合には、(括弧なしの）形式主義を用いる。但し、引用する場合は典拠先に準ずる。なお本論では、引用中の「……」は略を示す。

5　われわれが主たる考察の対象とする1920年代後半は、Л. トロツキイによる『ブィトの諸問題』（*Троцкий Л.* Вопросы быта // *Троцкий.* Сочинения. Т. 21. М.-Л.: Гос. изд., 1927.）や、С. トレチャコフや H. チュジャークを中心に、シクロフスキイも参加していた『新レフ』グループによる「ファクトの文学」というように、быт や факт という言葉そのものが大きな問題になっていた。本論ではエイヘンバウムの литературный быт やトゥイニャーノフの литературный факт といった概念を以下で採り上げるが、それらを быт や факт といった概念を取り巻く言説の同時代的布置において考察することはできなかった。これらを論じるには広汎且つ緻密な研究が必要なので、是非、稿を改めて論じたい。なお、これらの問題に関しては、文学が中心的に論じられてはいるものの、次のような文献がある。A. Flaker, “Быт,” *Russian Literature* XIX (1986).

6　この時期の социология という言葉は多様なニュアンスを含み、本来なら精査するべきなのだが、本論の論旨を越える問題なので、ここではフォルマリスト自身によってその語が用いられているという事実のみを指摘しておく。

提を得る作業である。そして第二部では、主にトゥイニャーノフの「雄弁術ジャンルとしてのオード」、「文学的ファクト」、「文学のエボリューションについて」を検討する。まず、トゥイニャーノフの反目的論的な姿勢を提示し、そこから「文学のエボリューションについて」において重要な概念である「ファンクション」を捉え直す。また、通常、「文学的ファクト」と「文学のエボリューションについて」はまとめて考えられているが、両者には見逃せない相違があることを提示する。「文学的ファクト」においてトゥイニャーノフが依拠していた「自動化－異化」の交替図式は、概念系を組み替えることによって「文学のエボリューションについて」では、より一般化されるとわれわれは考える。そしてこの移行が、トゥイニャーノフの「文学のエボリューション」に、文学史固有の時間をもたらすことになる。

本論が、フォルマリストに関する議論を活性化させると同時に、現代において語ることが甚だ困難な文学史一般の問題を論じるための、ささやかな試論となればよい。

1. トゥイニャーノフの「文学史」に向けて

(1) フォルマリズム論争から文学の社会学へ（エイヘンバウム）

周知の通り、文芸学の流派としてフォルマリズムをポピュラーなものとしたのは、1923年に出版されたトロツキイ『文学と革命』である[7]。もちろん、それ以前にもマルクス主義文学者がフォルマリストたちの著作に対して否定的に言及することはあったが、根本的にフォルマリズムという運動を重視していなかった[8]。フォルマリズムが批判の対象として矢面に立たされたのは、『出版と革命』1924年第5号における「形式的方法に関する議論に寄せて」という小特集である。これは、それまでに浴びせられたフォルマリズムに対する批判にエイヘンバウムが返答し、そのエイヘンバウムに対し、П. サクーリン、C. ボブロフ、A. ルナチャルスキイ、П. コーガン、B. ポリャンスキイらが更に批判を加えるという形のものであった[9]。エイヘンバウムの「『フォルマリスト』問題をめぐって（概要と返答）」が挑発的な論文であるため、マルクス主義陣営も対話的というよりは論争的に応えることになる。それ故、それぞれの論文をつぶさに追っていくことはあまり生産的ではない。ここでは、「エボリューション」の問題に限定し、検討していく。

---

7 「最終的に、比較的最近にトロツキイがこのこと［フォルマリスト問題］について意見を表明し、……「フォルマリスト」なるものが存在しているなどと、その時までおそらく気付いてもいなかったような新しい層の関心を、この問題に向けさせたのである」（*Эйхенбаум.* Вокруг вопроса. С. 1.）。

8 V. Erlich, *Russian Formalism: History-Doctrine,* 3rd ed. (New Haven: Yale Univ. Press, 1981), pp. 99-100. またハンゼン＝レーヴェも指摘するように、一方でフォルマリストたちも同様にマルクス主義陣営のことを考慮していなかった（*Ханзен-Лёве.* Русский формализм. С. 448.）。

9 これらの議論の全体像に関しては以下を参照。桑野隆「フォルマリズム論争再読：きたるべき詩学のために」桑野『バフチンと全体主義：20世紀ロシアの文化と権力』東京大学出版会、2003年、特に73-80頁。なお、桑野の論文はこの「フォルマリズム論争」を主題的に扱ったものとして希有なものである。例えば、『ロシア・フォルマリズム』においてエーリッヒはこの内容を概括的に伝えてはいるが、ロシア・フォルマリズムの全体像を提示する目的からか突っ込んだ議論がなされているわけではない（Erlich, *Russian Formalism,* pp. 99-110.）。この小特集「形式的方法に関する議論に寄せて」は、桑野隆・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド6：フォルマリズム 詩的言語論』（国書刊行会、1988年）に邦訳が所収されている。

「論争」において原理的に対立するフォルマリストとマルクス主義者は[10]、しかし、文学史に関して接点を持っている[11]。フォルマリズムとマルクス主義の関係が複雑なのは、「マルクス主義とフォルマリズムの間で接点があるからであり、これらどちらのシステムもエボリューションの事実に関係しているからである」[12]とエイヘンバウムは述べている。それはどのようなことなのか。

> 形式的学派は文学を特別な諸現象の系として研究し、文学の形式と伝統の、特別で具体的なエボリューションとして文学史を構築する。文学諸現象の起源についての問い（諸現象の習慣や経済の事実との結びつき、個人的心理学や生理学的作者との結びつきなどなど）は、概してつまらないものとしてではなく、一つの系のうちでは何も明らかにすることのないものとして意識的に回避されるのである。起源を示すことは、諸現象の結びつきを確認することであって、それらの**因果論的**被制約性を確認することではないのだ。……必要なのは、ただ異なる諸問題としてではなく、諸学問の諸問題として**エボリューション**の概念を**起源**の概念から区別することだ。[13]

史的唯物論を「歴史哲学」とするエイヘンバウムにとって[14]、「文学の歴史」である文学史は、その意味でマルクス主義と接点をもつことになる。しかし、フォルマリズムによる文学史は、「起源」ではなく「エボリューション」を研究することによって成る。ここでエイヘンバウムが「起源」や「因果論」という言葉でもって念頭においているのは、もちろん俗流マルクス主義の反映論的な文学研究方法である（「フォルマリズムはマルクス主義に自らを対立させているのではなく、ただ、社会的・経済的諸問題を芸術研究の領域へと単純に移すことに反対しているのである」[15]）。これらの点に関してサクーリンは、フォ

10　エイヘンバウムは、「『形式的**方法**』という語結合は、『史的唯物論的**方法**』という表現が無意味であるのと同様に無意味である」と述べているわけであるが（*Эйхенбаум.* Вокруг вопроса. С. 9）、「形式的方法」と「史的唯物論的方法」とを並置させることによって、ルナチャルスキイが指摘しているように（*Луначарский А.* Формализм в науке об искусстве // Печать и революция. 1924. № 5. С. 31.）、フォルマリズムも一つの世界観であるということをエイヘンバウムは吐露しているといえる。つまり、エイヘンバウム（やフォルマリスト）にとって、「**問題は、文学研究の諸方法についてではなく、文学の科学を構築する諸原則**」（*Эйхенбаум.* Вокруг вопроса. С. 2.）なのであり、フォルマリズムを文学研究における補助的手段とみなしていたわけではない。なお、フォルマリズムを世界観として批判するものは他に、*Жирмунский В.* К вопросу о “формальном методе”: Вступ. статья к русскому переводу книги О. Вальцеля “Проблема формы в поэзии”. Пг.: Academia, 1923.（ジルムンスキイ著、谷垣恵子訳「〈形式的方法〉の問題に寄せて」桑野ほか編『ロシア・アヴァンギャルド 6』）や *Медведев П.* Ученый сальеризм (О формальном (морфологическом) методе) // Звезда. 1925. № 3. などがある。なお、本論において原文でイタリック及び強調に当たる箇所は太字ゴシック体で表記し、下線は論者による強調を示す。

11　エーリッヒによれば、エイヘンバウムの論文において中心的課題は、この点、すなわち「フォルマリズムとマルクス主義との間の相互関係である」ということになる（Erlich, *Russian Formalism,* p. 108.）。

12　*Эйхенбаум.* Вокруг вопроса. С. 9.

13　Там же. С. 9.

14　「フォルマリズムは個別の学問＝科学のシステムであり、マルクス主義は歴史哲学的教説である［それ故、両者は対立するものではない］」（Там же. С. 9.）。

15　Там же. С. 10.

ルマリストとマルクス主義者の本質的な不一致は「文学のプロセスの社会的な性質」についての問題であるとし（エイヘンバウムは「素材［＝文学］は独自の特殊な社会学をもっている」[16]と述べている）、「エイヘンバウムはまるで文学を社会的生活の一般的プロセスから隔離することを欲しているようであり、文学諸現象の《起源学》（私の用語では、因果性）の領域に関係する全てを拒否する」として批判する[17]。「エイヘンバウムは文学の科学が文化史に従属することに抵抗する」と同じくサクーリンは述べているわけで、その点において彼は正しいのだが、しかし、エイヘンバウムは、作者個人の心理や社会・経済的事象と文学との結びつきが存在しないといっているわけではない。ただ、それらの系の一つ（例えば経済系）を取り出して文学の諸現象を論じるには限界があり、「ある学問的領域の一般的な図式を他の領域に移し替えることは、必然的に教条主義へと導かれる」[18]と指摘しているのだ。

フォルマリストとマルクス主義者の対立をいささか標語的にまとめるとするならば、「文学における社会学」と「社会学における文学」との対立ということになるだろう。文学史＝文学のエボリューションに限定して述べるなら、そこで問題化される「歴史」は、史的唯物論においては「経済基盤の発展＝階級の発展＝文学の発展」とされることにより、その目的論的な色彩を鮮明にし、一方、フォルマリズムの文学史においてはそのような目的論が設定されることなく、別の論理、すなわち文学史固有の時間が模索されることとなる[19]。

---

16 Там же.

17 *Сакулин П.* К спорам о формальном методе // Печать и революция. 1924. № 5. С. 14.

18 *Эйхенбаум.* Вокруг вопроса. С. 10.

19 この点で、ロシア・フォルマリズムは19世紀後半にドイツを中心に起こったヴェルフリンに代表されるような美術史の作り方（「人名のない美術史」など）とは一線を画す。もちろん、ロシア・フォルマリストたちの「将軍のない文学史」という表現からもわかるように、強い影響があることが一般的に指摘されているし、またエイヘンバウム自身、「『形式的方法』の理論」においてヴェルフリンなどに言及し（*Эйхенбаум Б.* Теория «формального метода» // *Эйхенбаум.* О литературе: работы разных лет. М.: Советский писатель, 1987. С. 376-377. 邦訳は、新谷敬三郎訳「《形式的方法》の理論」新谷敬三郎・磯谷孝編訳『ロシア・フォルマリズム論集』現代思潮社、1971年；小平武訳「「形式主義的方法」の理論」水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集1』せりか書房、1982年）、1919年1-2月の日記では「ヴェルフリンを読み続けている。文学史の構築とのアナロジーが常に思い浮かぶ」と述べている（なお、アーカイヴ資料であるこの日記からの引用は、*Эйхенбаум.* О литературе. С. 511からの孫引きによる）。しかし、メドヴェジェフ／バフチンも批判するように、ロシア・フォルマリズムは内容と同時にイデオロギー的なものを捨象してしまったがために、ヴェルフリンら美術史研究が有していた、形式を世界観で根拠付けるという姿勢を持っていない（*Медведев П.* Формальлый метод в литературоведении // *Бахтин М.М. (под маской).* Фрейдизм. Формальный метод в литературоведении. Марксизм и философия языка. Статьи. М.: Лабиринт, 2000. 邦訳は、M. バフチン著、桑野隆・佐々木寛訳『文芸学の形式的方法』新時代社、1986年）。この批判は正当なものであるが、フォルマリストたちは、美術史研究における形式主義を完全に模倣することを望んだわけではない。というのは、ハンゼン＝レーヴェも指摘するように、美術史研究における形式的方法のイデーを継承しているのはむしろ、A. レフォルマツキイやM. ペトロフスキイによる（ハンゼン＝レーヴェによれば、ジルムンスキイやトマシェフスキイも加えることができる）、「目的論的コンポジションの理論」ということになる（*Ханзен-Лёве.* Русский формализм. С. 255-263.）。またヴォロシノフ／バフチンがヴェルフリンを敷衍しながら「他人の言葉」を「線的様式／絵画的様式」と分類していることも現れているように（*Волошинов В.* Марксизм и философия языка // *Бахтин (под маской).* Фрейдизм. С. 449-452. 邦訳は、M. バフチン著、北岡誠司訳『言語と文化の記号論：マルクス主義と言語の哲学』新時代社、1980年；M. バフチーン著、桑野隆訳『マルクス主義と言語哲学：言語学における社会学的方法の基本的問題』未来社、1989年）、（ヴェルフリンに限らず）当時のロシアにおけるドイツ美学の影響は、国立芸術学アカデミーの活動などを含め、より広汎な文化論的射程をもつ問題であり、稿を改めて論じたい。

しかし、「内在的」研究から出発している彼らには、「歴史」を手際よく自らの理論のうちに組み込むことができない[20]。そのとき、分析対象の同時代的コンテクストを自らの研究に取り込むことになり、「文学における社会学」が問題として顕在化し、文学史の問題が社会学の問題に接続されることとなる。

そのような意味で、文学外系と文学系との関係をいかに文学研究に織り込んでいくか、それこそがこの「論争」の後に本格的に展開されることとなる後期フォルマリストたちの課題であった[21]。そこで問題化されるのは、「文学」という概念の拡張の仕方であり、フォルマリストたちによるその仕方の相違が後期フォルマリストたちの立ち位置を決定することになる。エイヘンバウムにとってはそれが、литературный быт という概念として生成する[22]。この литературный быт とトゥイニャーノフの литературный факт という概念を比較してみると、エイヘンバウムのとった戦略が如何なるものであったかよくわかる。これらの概念はしばしば混同されてきた[23]。M. ソーサは、トゥイニャーノフの「「文学的ファクト」、「文学のエボリューションについて」や「過渡期」のような論文は、エイヘンバウム「文学的ブィト」やトマシェフスキイ「文学と伝記」、あるいはグリッチとその同僚

20　真のレールモントフは、歴史的レールモントフである」とエイヘンバウムが述べたとしても（*Эйхенбаум Б.* Лермонтов: опыт историко-литературной оценки // *Эйхенбаум.* О литературе. С. 144.）、彼にとって「歴史」は複雑な問題であった。「出来事を歴史的に研究することは、それをある時代［время］の状況下でのみ意味をもっている単一的なものとして記述することではない」（Там же.）と述べているように、エイヘンバウムは単純な歴史主義者ではない。その活動の初期から晩年に至るまでの、エイヘンバウムの「歴史」に関する態度を粗描したものとしては、I. Serman, “Б.М. Эйхенбаум и проблема истории,” *Revue des études slaves* LVII/ 1 (1985). を参照。

21　但し、この「論争」及びマルクス主義陣営からの圧力は、直接的にフォルマリストをして「内在的」研究を放棄させしめたわけではないとわれわれは考える。フォルマリストはそれ以前から文学史の問題を焦眉の課題としていた。例えば、自らの論文集『文学を通して』に付された 1923 年付の序において、それまでの自らの学問的歩みを振り返りながらエイヘンバウムは、「完全に明らかなのは、これらの［自分が扱ってきた］問題に対する何らかの解決がない状態では、［学問としての］文学史は発展し得ない」（*Эйхенбаум Б.* Сквозь литературу: сборник статей. Л.: Academia, 1924. С. 4.）と述べている。また、『レールモントフ』における同じく 1923 年付けの序においては、「レールモントフに関する私の著作は、彼の作品を文学史的なファクトとして研究する試みであり、つまり、個人的・心理学的ファクトではなく、社会的ファクトであるが……」（*Эйхенбаум.* Лермонтов: опыт. С. 142.）と述べられ、彼が「文学史的」と「社会的」とを同列に扱っていることが示されている。但し、このようなフォルマリストたちの「社会学化」は決してマルクス主義文学者を満足させるものではなかった。エイヘンバウム「文学的ブィト」やトゥイニャーノフ「文学のエボリューションについて」を「フォルマリズムの危機」として捉え、比較的早い時期に反応した M. グリゴリエフは、いわゆる形式主義から「社会」へ目を向けた両者を評価しながらも、導き出される帰結が「ジャンルの移行」や「スタイルの変化」といった旧来のフォルマリズムの用語系で処理されていることに不満を述べている（*Григорьев М.* Кризис формализма // Печать и революция. 1927. № 8. С. 84-91.）。その後、このフォルマリズムの「転向」の不徹底さを批判するものとしては、Литература и марксизм: журнал теории и истории литературы. Кн. Первая, 1929. や、*Горбачев Г.* (ред.) За марксистское литературоведение: сборник статей. Л.: Academia, 1930. がある。

22　以下、論文としての「文学的ブィト」を「文学的ブィト」と表記し、概念としての「文学的ブィト」を литературный быт と表記する。トゥイニャーノフ「文学的ファクト」についても同様。

23　ハンゼン＝レーヴェは次のように述べている。「トゥイニャーノフのコンセプト《文学外的ブィト》と、トゥイニャーノフのコンセプトとほぼ同時にエイヘンバウムによって作られた《文学的ブィト》との本質的な差異は、彼らと同時代のフォルマリズムの解釈者たちによっても、後の解釈者たちによっても同様に気付かれないままであった」（*Ханзен-Лёве.* Русский формализм. С. 388.）。なお、ПИЛК（В. カヴェーリン／ A. ミャスニコフ責任編集のもと、E. トッデス／ A. チュダコフ／ M.

による 1927 年『言語芸術と商業』と、完全に論理的に結びつけられている」と述べる[24]。ソーサは、しばしば体制との妥協と考えられている後期フォルマリズムの社会学化を、もともとフォルマリズムが内包していた論理的帰結と解釈することによって、いわゆる形式主義を超出するフォルマリズムを提示している。フォルマリストたちの社会学化を日和見としないその主旨には賛同するものの、たとえ「文学的ブィト」や『言語芸術と商業』が肯定的にトゥイニャーノフ「文学的ファクト」を採り上げ、実際にその用語を用いているにしても、双方の概念を大きな枠で括るのも乱暴であろう[25]。

結論から言えば、エイヘンバウムが文学史を考えるにあたり、литературный быт を導入することにより、その時代の文学的環境・制度を問題化し、自らの方向を社会学化していったのに対し、トゥイニャーノフは逆に文学のシステムを純化し、むしろ自律化させていったといえる[26]。しばしば混同される二つの概念なので、本来、詳細に論じるべき問題であるが、エッセンスのみ押さえておこう。エイヘンバウムは、「例えばプーシキンの四脚ヤンブは、(因果的面においてのみならず、被制約性の面においても) ニコライ時代の一般的な社会的・経済的条件とも、その時代の文学的ブィトの特殊性とさえも、結びついてい

チュダコヴァによって詳細な注釈が付せられた以下のトゥイニャーノフの論文集を、通例にならって本論では、ПИЛК と略記する。*Тынянов Ю.* Поэтика. История литературы. Кино. М.: Наука, 1977.）の注釈においても両者の相違は指摘されているが、十分にその意義が述べられているわけではない（「実際、文学史の理論的な基礎付けへの志向、エボリューションと起源のカテゴリーの相違、文学外諸系へと向かう模索は、エイヘンバウムにもトゥイニャーノフにも特有なことである。しかし彼らは二つの別の道を目標にしていた。微視的で具体的な研究と《予想を上回る》理論的な構築とである」（ПИЛК. С. 520-521））。

24 M.R. Sosa, “Jurij Tynjanov: Method and Theory.” Ph.D. dissertation in comparative literature (University of Wisconsin, 1987), p. 207.

25 但し、ソーサの述べる『言語芸術と商業』、また 1929 年に出版された M. アロンソン／C. レイセル『文学サークルとサロン』は、「文学的ブィト」で述べられる方法論を用いた文芸社会学的な傾向の著作ということができる。また、『言語芸術と商業』の「編集者から」をシクロフスキイが、『文学サークルとサロン』の「序」をエイヘンバウムが、それぞれ執筆している（*Гриц Т., Тренин В., Никитин М.* Словесность и коммерция: Книжная лавка А.Ф. Смирдина. М.: Федерация, 1929; *Аронсон М., Рейсер С.* Литературные кружки и салоны. СПб.: Академический проект, 2001）。ちなみに H. ベリチコフは『文学サークルとサロン』に対し、そこで立てられる「文学のエボリューション」か「サークルやサロンの変化」かという問いに対し、第三項としての最も基盤的に存在している社会的・階級的視点がまったく抜け落ちていることを批判している（*Бельчков Н.* Отзыв о книгах // Печать и революция. 1929. № 12. С. 92-96.）。

26 注 23 において少し触れたが、両者の相違を指摘しながら、ハンゼン＝レーヴェがエイヘンバウムの литературный быт を肯定的に評価するのは、エイヘンバウムがその概念によって「文学作品」を社会的コミュニケーションにおいて眺め、「文学（研究）」という概念を、そのコミュニケーションがなされる場としての社会にまで拡張したことによる（*Ханзен-Лёве.* Русский формализм. С. 388.）。この認識自体はわれわれと軌を一にする。フォルマリズムに関する彼の著作は、比類ないものであることは間違いない。ただ彼の著作を読解する際、念頭におかなければならないのは、彼がフォルマリズムの活動を、その根底にある「異化」の理論が作品レベル→ジャンルレベル→社会レベルといったふうに、ミクロからマクロへとイゾモルフィックに展開（＝「発展」）していく運動として捉えていることである。その観点から見れば、ハンゼン＝レーヴェにとってトゥイニャーノフはいささか「内在的」過ぎたのであろう。しかしわれわれは、その「内在的」であることをもってトゥイニャーノフを肯定したい。なお、文学研究を社会的コミュニケーションの相で眺めるというコンセプトをもとに、エイヘンバウムを中心にフォルマリストたちと「同時代の社会＝быт」の関わりを考察したものとしては Aage A. Hansen-Löve, “«Бытология» между фактами и функциями,” *Revue des études slaves* LVII/ 1 (1985). を参照。

るはずがない。しかし、雑誌散文へのプーシキンの移行は、従って、この時期の彼の創作のエボリューション自体は、1830 年代初めにおける文学著作の一般的プロフェッショナル化や、文学的ファクトとしてのジャーナリズム活動の新しい意味によって条件付けられている」[27]と述べているが、これはトゥイニャーノフが литературный факт として挙げる手紙や新聞・雑誌などの例とは明らかに異なる。例えば、「手紙がその文学的役割を終え、再びブィトへと下降し、文学に刺激を与えることなく、ブィトのファクトに、書類に、受領書になってしまうようなエポックを追うことは難しいことではない。しかし、必要な条件のもとで、このブィト的ファクトは再び文学的ファクトになるだろう」[28]とトゥイニャーノフは述べている。つまり、作品研究レベルで述べるなら、エイヘンバウムは литературный быт の側から文学作品を眺めているのに対し、トゥイニャーノフは文学作品に見出される быт=литературный факт をシステムとしての文学作品内部から眺めている（「ブィトが文学作品に入っていくところで、ブィトは文学そのものとなり、そして литературный факт として評価されなければならない」[29]）。ブィトを基準にして言い換えれば、ブィトを無制限に文学史に組み込むのではなく、文学を取り巻く環境・制度に限定するために литературный быт として措定し、それと文学作品との関係を外部から論じようとしたのがエイヘンバウムなら、文学作品や文学系に入り込んだブィトを литературный факт と措定することにより、文学（系）外部を文学（系）内部に組み込むことによって、文学（系）システム内で考えたのがトゥイニャーノフである。敷衍して考えるなら、ブィトの実在性（「外部性」）を前提とし、それを文学に関するブィトに限定するための概念が литературный быт であり（この意味でエイヘンバウムは、「文学（研究）」の適応範囲を拡張したといえる）、ブィトの実在性（「外部性」）を問題にすることなく、文学との関係性においてのみ初めて存在するようなブィトを示すのが литературный факт ということになる。

エイヘンバウムが導入した литературный быт は文学（系）外部からの眼差しであるため、われわれの観点から言えば、「文学史」に「ブィトの時間」を安易に取り入れてしまう危険性を伴っている[30]。「微視的で具体的な研究」に目を向けるエイヘンバウムにとって、

27　*Эйхенбаум Б.* Литературный быт // *Эйхенбаум.* Мой временник. СПб.: Инапресс, 2001. С. 68. 邦訳は、小平武訳「文学の風俗・慣習」水野編『ロシア・フォルマリズム文学論集 1』。

28　ПИЛК. С. 266. 邦訳は、水野忠夫訳「文学的事象」水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集 2』せりか書房、1982 年；松原明訳「文学的事実：V. シクロフスキイに捧ぐ」松原明・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド 7：レフ 芸術左翼戦線』国書刊行会、1990 年。

29　*Тынянов Ю.* Проблема стихотворного языка // *Тынянов.* Литературная эволюция: избранные труды. М.: Аграф, 2002. С. 146. 邦訳は、水野忠夫・大西祥子訳『詩的言語とはなにか：ロシア・フォルマリズムの詩的理論』せりか書房、1985 年。

30　エイヘンバウムがブィトを扱ったことに対するハンゼン＝レーヴェの肯定的評価が示すように、われわれもまた決してそれをマルクス主義への日和見とは考えない。литературный быт を文学史＝文学のエボリューション研究に導入したのは、いかにもエイヘンバウムらしい論理だといえる。というのは、エイヘンバウムは、現代的な視点からみた「アクチュアリティ」を「歴史」に見出すことをその研究の意義と考えているわけであるが（「歴史はこの意味で、過去の諸ファクトによって現代を研究する特別な方法である」（*Эйхенбаум.* Литературный быт. С. 62.））、彼が литературный быт を問題化したのは、例えば、1910 年代にあった「文学のテクノロジー」「如何に書くか」という問題意識が、1920 年代においては「如何に作家になるか」という問いへと移ったからである。彼の言葉で述べるなら、「決定的に言えるのは、今、危機を経験しているのは文学それ自身ではなく、その社会的な現存［бытование］なのである。作家のプロフェッショナルな地位が変わったのであり、作家と読者の相関関係が変わったのであり、文学的著作の習慣的な条件や形式が

大きな時間の流れ（＝文学史のレベル）において литературный быт（＝文学的環境・制度）を検討することは困難であり、このとき彼が扱いうるのは、литературный быт を過度に拡張する必要のない時間、すなわち伝記的時間である。それ故にこそ、エイヘンバウムによる『若き日のトルストイ』、『トルストイ』、『レールモントフ』といったモノグラフがあると考えることができるのではないか。素朴に考えて、「将軍の文学史」を否定した彼らがモノグラフという形態で仕事をすることが奇異なのである。もちろん、従来の研究には見られない新しい литературный быт を盛り込んで対象の「エボリューション」を論じるわけであり[31]、示唆に富む論考であることに間違いはないが、逆に言えばそのようにしか彼は「エボリューション」を論じることができなかった。そしてそれは、「外部」としての литературный быт を導入することによって、ブィトの時間そのものの介入を許し、文学史固有の時間を相対化してしまった帰結であると考えられる。

(2) 交替図式としての文学史（シクロフスキイ）

エイヘンバウムと同様に、『トルストイ「戦争と平和」における素材と文体』（1924）において、史実と『戦争と平和』を比較しながら、トルストイにおける「変形」を問題化したシクロフスキイも、当時の社会的コンテクストを射程に入れるという点で社会学化したということができるだろう。シクロフスキイは「学問的誤謬の記念碑」において、「最初の私の歴史に関する仕事は、『レフ・トルストイ「戦争と平和」における素材と文体』という本であった」としているわけだが[32]、しかし彼は、それ以前から「異化」に依拠した文学史における交替のメカニズムを考察している。それ故、まずはシクロフスキイの交替のメ

変わったのであり、文学の外部に置かれた諸条件への文学の依存と、そこからの文学のエボリューションそのものをさらけ出す литературный быт そのものの領域で、決定的な転位が起こったのである」（Там же. С. 63.）ということになる。当時がそのような状況であるが故に、彼は「文学史」においても литературный быт に眼差しを向けることになるのだ。

31 「現代の文学的諸現象に必要不可欠な学問的ディシプリンとして文学史を新たに正当化しなければならない」（Там же. С. 64.）と考えるエイヘンバウムにとって、「一般に学問は、説明するのではなく、ただ特別な質と諸現象の相関を設定するのみである。歴史は一つの『なぜ』にも答えることはできず、ただ『それが何を意味するか』という問いに答え得るのみである」（Там же. С. 67.）のであり、「我らが文学の現代的状態が新たな諸問題を立て、新しい諸ファクトを引き出す」（Там же. С. 63.）こととなる。

32 「学問的誤謬の記念碑」からの引用は、*Галушкин А.* «И так, ставши на костях, будем трубить сбор...»: К истории несостоявшегося возрождения Опояза в 1928-1930 гг. // НЛО. 2000. № 44. に付せられた付録「学問的誤謬の記念碑」第二稿による（С. 154-158.）。なお、1930 年 1 月 27 日付「文学新聞」に掲載されたものは第三稿にあたる（*Шкловский В.* Памятник научной ошибке // Литературная газета. 27 января 1930. 第三稿の邦訳としては以下を参照。桑野隆訳「科学的誤謬の記念碑」桑野ほか編『ロシア・アヴァンギャルド 6』）。本論においてわれわれが第二稿を採用する理由は、ただこの「学問的誤謬の記念碑」第二稿が、トゥイニャーノフ／ヤコブソン「文学研究および言語研究の諸問題」への「返答」であったことを明確に示していると考えるからである（なお、「文学研究および言語研究の諸問題」の邦訳は以下を参照。磯谷孝訳「文学および言語研究の諸問題」新谷ほか編『ロシア・フォルマリズム論集』；北岡誠司訳「文学研究・言語研究の諸問題」水野編『ロシア・フォルマリズム文学論集 2』）。第二稿においては、第二節を除くそれぞれの節にエピグラフとして「文学研究および言語研究における諸問題」のテーゼが置かれている。このことはもっと指摘されても良い事実であろう。それ故、引用にあたってはあらわれることのないこの構成的差異を考慮し、第二稿を採用した。以後、「学問的誤謬の記念碑」から引用する場合、第二稿と第三稿で異同がある際には指摘する。この引用は C. 156. を参照し、第二項では主格であった「最初の私の歴史に関する仕事」が、第三項では造格になっている。

カニズムを確認しよう[33]。

「文学史は不連続で折れ曲がった線にそって前進する」と述べるシクロフスキイは、「文学流派の交替に際し相続は、父から子ではなく叔父から甥へと向かう」と比喩的に語るのであるが、それが可能となるのは、「おのおのの文学エポックに存在しているのが、一つではなく幾つかの文学流派である」からであり、「それらは文学において同時的に存在し」、それらのうちの一つが「規範化された」頂点とみなされ、「他の流派は、存在しなかったかのように、規範化されずに、ひっそりと存在している」とする[34]。続けて「実際、問題は、新しいヘゲモニーが通常、過去の形式の純粋な復興ではないことによって複雑化され、他の若い流派の特徴があることによって、ならびに、既に従属的な役割に落ち込んでしまったが、王座にあったその先行者から受け継いだ特徴によって、複雑になっている」[35]と述べることによって彼は、「交替」ではなく「継起的発展」を考慮しているといえるが、基本的にシクロフスキイが説明しうるのは、異化の図式に則った「交替」のみである[36]。

その点で、上で検討してきたテクストの時期からは少しくだることになるが、トゥイニャーノフに宛てられたシクロフスキイの書簡（1929 年 3 月 4 日付）は非常に興味深い。この書簡は、遅くとも 1929 年 2 月初めにはプリボイ社から出版されていた、トゥイニャーノフの論文集『擬古主義者と革新者』へのシクロフスキイの反応と考えてよい[37]。少し長くなるが引用する。

> 文学は時間外的（вневременный）であって、つまり、文学はピアノのようなものではなく、オルガンのようなもの―音が長く続いているもの―なんだ。従って、原因と結果の同時性（одновременность）があり、つまり、モードは交替するけれど、たゆたい続けているんだ。／ドン・キホーテはトゥルゲーネフと同時的である。エボリューションについてここで語るのは難しい、というのは、より良くなるという徴が存在しないわけだし、……。「擬古主義者とプーシキン」の欠点、それは、（方法論的には正しい）二つのラインの孤立性であり、立体的に計測されるべき課題が平面において解決されていることだ。もしかしたら、われわれが擬古主義と呼んでいるものや、君は著作の中で全く名付けていないけれど、擬古主義に対置したもの、それらは存在しうるだろう。でもそれはただ、大きな相関関係の部分的なケースでしかないし、もしかしたら対をなさない相関かもしれない。[38]

33　シクロフスキイの文学史観に関しては、佐藤千登勢「ヴィクトル・シクロフスキイ：規範の破壊者」（2002 年度課程博士論文、早稲田大学大学院文学研究科）、特に 64-87 頁を参照。

34　*Шкловский В.* Розанов: из книги «сюжет как явление стиля». Пг.: Изд-во ОПОЯЗ, 1921. С. 4-6. 邦訳は、「『主題』をはなれた文学」V. シクロフスキー著、水野忠夫訳『散文の理論』せりか書房、1971 年。

35　*Шкловский.* Розанов. С. 7.

36　フォルマリストは「異化」に基盤を置くことによって、文学史における「発展」を扱うことができないという『文芸学における形式的方法』におけるメドヴェジェフ／バフチンによる批判を参照。

37　付言すると、トゥイニャーノフはこの論文集のタイトルに関してシクロフスキイに相談していた。シクロフスキイは『擬古主義者と革新者』の名称について「彼の考えをより明瞭に表現するであろう、『擬古主義者＝革新者』という異なる名前を提案し、A.A. アフマートワもこれに賛成した」と述べている（*Шкловский В.* Тетива. О несходстве сходного // *Шкловский.* Избранное в 2-х т. Т. 2. М.: Художественная литература, 1983. С. 136.）。

38　Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским. Вст. заметка, публикация и комментарии: Панченко О. // Вопросы литературы. 1984. № 12. С. 196-197.

まずわれわれが確認したいのは、「文学」がそもそも「時間外的」なものであるというシクロフスキイの認識だ。「原因と結果の同時性」とは時間的継起性の排除である。次に指摘したいのは、彼が「エボリューション」という言葉で念頭においているのが、「より良くなる」こと、素朴な意味で「発展」であることだ[39]。これらから判断すると、ここでもやはり、彼にとってはいわゆる文学史を構築することが原理的に不可能であることが明らかになる。というのは、彼が提示する文学史における交替のメカニズムは、「原因と結果の同時性」という相の下に構築されているといえ、そこで示される交替は決して「より良くなるという徴」を帯びているわけではない。それ故、通常われわれが「シクロフスキイによる文学史」として想起する交替図式は、少なくともこの書簡が書かれた1929年の時点では、彼にとって「文学のエボリューション」とは見なされていないといえる。このことを考慮すると、この節の冒頭で引用した「学問的誤謬の記念碑」において彼が、最初の「歴史に関する仕事」として『レフ・トルストイ「戦争と平和」における素材と文体』を挙げていることもより理解することができるだろう。彼はその「歴史に関する仕事」の結論部で次のように述べている。

> 量的な変化が質的な変化となり、そしてこれが新しいジャンルの発生なのである。新しいジャンルは古いジャンルの懐において、初めは規律から外れたディテールの堆積として発生する。しかし作品の評価、それは初め伝統的なジャンルの視点からなされ、そしてただその後、量的な間違いが、「偏差の間違い」が、新たなジャンルの質へと変わるのだ。このとき、それら間違いは美学的現象となり、美学化され、自らのもつ当初の志向を失う。[40]

このとき、シクロフスキイの「エボリューション」は、量的な変化の堆積が質的な変化に転化するという意味で弁証法的であるといえる。彼がこの著作を「歴史に関する仕事」と述べる時、念頭にある「文学のエボリューション」とは、断絶的「交替」ではなく、連続的「弁証法」なのであろう。この「転向」をマルクス主義的文学観への日和見と捉えることも可能であろう。しかし、このシクロフスキイの変化を、われわれはむしろ、「自動化－異化」の交替図式に依拠したままでは、歴史的時間、すなわち彼のいうところの「エボリューション」を扱うことできないが故に、「文学史」の問題に直面した時に、彼が採ったアプローチだと考える[41]。

書簡へと戻ろう。ここで更にわれわれが着目するのは、件のトゥイニャーノフの論文集に収められた「擬古主義者とプーシキン」に対するシクロフスキイの直接的な指摘だ。シクロフスキイにとって「擬古主義者とプーシキン」は、自らの『レフ・トルストイ「戦争と平和」における素材と文体』と同様、「歴史に関する仕事」として認識されるべき論文で

39　『擬古主義者と革新者』には「文学のエボリューションについて」も所収されている。

40　*Шкловский В.* Матерьял и стиль в романе Льва Толстого «Война и мир». М.: Федерация, 1928. С. 237. なおシクロフスキイのこの著作全体に対する、エイヘンバウムの賛辞は、Из переписки Ю. Тынянова. С. 190-191. を参照。

41　甚だ対比的なので予め指摘しておくと、シクロフスキイによって「新たなジャンルの質へと変わる」と捉えられる「量的な間違い」や「偏差の間違い」、すなわち「間違い」という要因を、トゥイニャーノフは、特にその「フレーブニコフについて」において、質的なものとして捉えているといえる。トゥイニャーノフの「偶然性」については本論第二部で論じる。

ある。彼が、トゥイニャーノフの「二つのラインの孤立化」を「対をなさない相関かもしれない」と批判する時、想定される「大きな相関関係」とはいったいどのようなことなのか。それは例えば「学問的誤謬の記念碑」において、次のように述べられる事態なのだと考えられる。

> 間違いだったのは、作業に必要な系を分離したことではなく、この分離を固定したことであった。私の間違いは、……作品を閉じたシステムとして、文学のシステム全体や文化を形成する経済的系との相関関係の外で研究しようとしていたことにある。／文学現象の研究のプロセスにおいて経験的に明らかになったのは、作品それぞれはただ他の作品を背景として存在していること、作品はただ文学システム内でのみ理解されることであった。／そこから基礎的な結論を導くことなく、私はこの観察を自分の思考体系へと組み込んだ。／文学形式の発生、それは広汎な社会的プロセスである。[42]

ここで明らかなのは、フォルマリスティックな方法論は作業仮説としては間違いではなかったとしながら、それを越えて社会的なものへと文学研究を開いていこうとするシクロフスキイの姿勢である。当時、オポヤズを再興させようとしていたシクロフスキイが、「学問的誤謬の記念碑」第二稿において、その再興の足がかりとなるトゥイニャーノフ／ヤコブソン「文学研究および言語研究の諸問題」[43]をエピグラフとして掲げながら上のようなことを記したことは、「日和見か否か」という問題には回収し切れない意義があると考える[44]。つまり、シクロフスキイが「擬古主義者とプーシキン」に対して述べた「大きな相関関係」とは、「文学形式の発生」を「広汎な社会的プロセス」において捉えることを意味しているといえるのではないか。シクロフスキイは、「機能面[45]における文学のエボリューションの研究の為に、私の意見では、マルクス主義的方法を完全に知ることが不可欠だ。／もちろん、私は自分がマルクス主義者であると宣言してはいない。なぜなら、そ

42　*Галушкин.* «И так, ставши на костях». С. 155. 第二稿から第三稿への異同は、引用二行目「私の間違いは」→「作業の方法は」、引用三行目「研究しようとしていた」→「研究していた」、そして第三稿では上記引用最後に改行後、「これが間違いだった」と加えられている。

43　1928 年終わりから 1929 年初めにかけて、シクロフスキイ、エイヘンバウム、トゥイニャーノフ、ヤコブソンの間でオポヤズ再興が話題になっていたことは彼らの書簡から窺える。また、文学史の問題が前景化していたことも同じ時期の書簡で明らかになる（Из переписки Ю. Тынянова. 特に С. 190-196.）。例えば 1928 年 9 月～ 10 月初めのトゥイニャーノフ宛シクロフスキイの書簡には、「私はマトヴェイ・コマロフについて書くだろうけど、もう一度、何か著作を一緒に書くことを本当に真剣に君に提案するよ。例えば、18 世紀のこと」と述べている（Там же. С. 191.）。また、シクロフスキイは、「文学研究および言語研究の諸問題」をオポヤズ再興の基本テーゼとしてみなし、Б. ヤルコーや С. ベルンシテインなどにこのテーゼに対する意見を求めていた（*Галушкин.* «И так, ставши на костях». С. 142-144.）。

44　もちろん、シクロフスキイの意図を容易に判断することはできない。「学問的誤謬の記念碑」において、シクロフスキイが同じ主題に対して肯定・否定の両方から述べていることを指摘し、佐藤は、それを「手法としての降伏宣言」と捉えることにより、「異化」を実践するテクストとして「学問的誤謬の記念碑」を考察している（佐藤「ヴィクトル・シクロフスキイ：規範の破壊者」178 頁）。

45　ここでは функция を「機能」と訳出したが、本論においては以下でこの「ファンクション」という概念そのものを問題化する。

れは学問的方法に至っていないのだから」[46]と矛盾して語るわけだが、「学問的誤謬の記念碑」における他の矛盾した発言も含めこれらが示すのは、シクロフスキイが内在的文学研究を乗り越えようとし、文学史＝文学の社会学を目指してはいるのだが[47]、文学外的なものを扱うための理論的基盤を整えることができず、「マルクス主義」の前で逡巡していることなのだとわれわれは考える。

さて、ここでシクロフスキイの「機能」という言葉に触れておきたい（トゥイニャーノフの「ファンクション」という概念に関しては後に詳述する）。興味深いことに、引用にある「機能面」という言葉は、文学新聞に掲載された版では「社会面」と言い換えられている。そこで、これに関連して言及する必要があるのは、エイヘンバウムとシクロフスキイが編集した『言語芸術と商業』の「編集者から」においてシクロフスキイが述べている次のような言葉である。「この本の著者たちは、いわゆる литературный быт（エイヘンバウムの用語）が文学のエボリューションの第一原因であることをまったく前提としていない。けれど彼らは、литературный быт の分析が、様々な時代における文学の機能の変化の分析のための素材を、われわれに与えうると考えている」[48]。この引用や、「機能面」から「社会面」への言い換えから明らかなのは、彼にとって литературный быт と「機能」、そして「社会」が結びついていることである。更に、エイヘンバウム『レフ・トルストイ第一巻』についてシクロフスキイは、「トルストイに関する君［エイヘンバウム］の本をとても注意深く読んだよ。その中で最も興味深かったのはトルストイについてではなく、彼の周りについてだ。この本の成功は、この「周り」が自然にトルストイに移っていることであり、力線の交差点を正しく示していることだ」[49]と述べている。彼のいう「周り」が意味して

---

46 *Галушкин.* «И так, ставши на костях». С. 158. なお、1月27日付「文学新聞」に掲載された第三稿では「社会面における文学のエボリューションの研究の為に、社会学的な手仕事は絶対的に役に立たない。／全体としてマルクス主義的方法への意向が不可欠だ。／もちろん、私は自分がマルクス主義者であると宣言してはいない。なぜなら、それは学問的方法に至っていないのだから。方法を獲得し、また方法を産み出しつつある」となっている。

47 シクロフスキイも「文学史」へ眼差しを向けていたことは、1928年1月16日付エイヘンバウム宛シクロフスキイの書簡にある、「**ロシア文学史**［История Русской Литературы］がわれわれを待っている」からも明らかである（Из переписки Ю. Тынянова. С. 190.）。なお、この書簡の末尾において「ヘーゲルを読み始める必要がある」（Там же.）とシクロフスキイは述べているが、「文学史」がテーマとなっている書簡の末尾なだけに興味深い言葉ではある。但し、フォルマリストとヘーゲルの関係を論じるには、ひじょうに慎重に構えなければならない。例えば、フォルマリズム（特にシクロフスキイ）とヘーゲルの関係を中心的に論じたものとして *Парамонов Б.* Формализм: метод или мировоззрение // НЛО. 1995. № 14. や、フォルマリズムの「文学のエボリューション」とヘーゲルの歴史哲学に言及するものとしては *Калинин И.* История литературы: Между пародией и драмой (к вопросу о метаистории русского формализма) // НЛО. 2001. № 50 があるが、この問題を大雑把に扱うと、カリニンが「フォルマリストたちによって創造された文学の運動の通時的モデルにおいて無意識的な『ヘーゲル的バックグラウンド』が明らかになっていることは、いっそう興味深い」と表現していることが示すように、「たぶんロシアの知的生活におけるヘーゲル哲学の伝統のせいで、かれ［トゥイニャーノフ］は文学を、動的（ダイナミックな）な階層関係、支配権をめぐる部分と全体の絶え間ない相克と見るようになったのであろう」（P. スタイナー著、山中桂一訳『ロシア・フォルマリズム：ひとつのメタ詩学』勁草書房、1986年、105頁）というような曖昧な議論になってしまう。

48 *Гриц и др.* Словесность и коммерция. С. 7.

49 *Шкловский В.* Поденщина. Л.: Изд. писателей в Ленинграде, 1930. С. 220. なお、この引用は1928年1月16日付エイヘンバウムへのシクロフスキイの書簡に付された注釈から孫引きした（Из переписки Ю. Тынянова. С. 190.）。

いるのは、литературный быт であるのは明らかだ。このように、シクロフスキイにとって、「機能」、「社会」、「ブィト」は強固に結びついている。

文学史＝文学のエボリューションという観点から述べるなら、「機能面＝社会面」に目を向けたシクロフスキイにとって、「マルクス主義」が一考に価するものであったのは確実ではないだろうか。彼は「異化」に準拠する交替図式によって文学史における「交替」は示し得たのであるが、確認した通り、彼にとっては「文学史＝文学のエボリューション＝文学の発展」であるのだから、「より良くなる徴」が必要な彼の「エボリューション」には、どうしても準拠点が必要になってくる。『レフ・トルストイ「戦争と平和」における素材と文体』から先に引用した部分においては、かろうじてその準拠点はジャンルの問題に踏み止まっているように思われるが、内在的研究を否定することによってブィトへ目を向けた時、その準拠点として「社会的なもの」が魅惑的に見えたとしても不思議ではない。このような帰結に至ったのは、シクロフスキイが、文学系における諸作品を「時間外的」と見なし、それを「原因と結果の同時性」と捉えることにより、「ローザノフ論」で提示した文学史における交替図式を、「文学のエボリューション」の理論へと深化させ得なかったことによるといえる。「より良くなる」ものとしての「エボリューション＝発展」を念頭においた彼にとって、交替図式においては原理的に文学史を扱うことができない。それ故、彼がある作品に対して「歴史的研究」を行う際、歴史的・社会的コンテクスト（＝ブィト）を導入せざるを得なかったのだ[50]。

ここまでエイヘンバウムとシクロフスキイの「文学史」を検討してきた。

エイヘンバウムは、литературный быт を設定することによって、文学外的なものを限定的に考察することを可能にしたものの、литературный быт の側から文学（系）を眺めることによって、「微視的な研究」へ移行することとなった。一方シクロフスキイは、彼が文学史の問題へ向かったとしても、彼の「自動化－異化」という認識的枠組みにおいては史的時間を扱いきることができず、結果的にマルクス主義的方法論へと接近をはかることになることをわれわれは確認した。彼らは内在的なフォルマリズムに限界を感じ、それを社会的なものに開いていこうとしたわけであるが、それ故、結果的に素朴な形で社会的なものに重心を移さざるを得なかったといえる。これは、究極的には彼らが、「文学」と「文学外」という二元論の枠内で思考していたことの帰結であるといえるだろう。われわれは第二部で、「閉じることによって開く」とも名付けられるべきトゥイニャーノフの一元論的な「文学史＝文学のエボリューション」を検討する。しかしその前に、バフチン及びバフチン・サークルとヤコブソン、それぞれの提示する「エボリューション」概念を通じて、もう一つの二元論を検討するための前提を用意する。その二元論とは、共時態／通時態である。

50　但しシクロフスキイは、「これらの［文学のエボリューションの］問題を研究する際、様々なイデオロギー的諸上部構造のエボリューションのテンポは必ずしも下部構造のテンポと一致するわけではないことを理解する必要がある」として『経済学批判序説』を引用しているのであるが（*Галушкин.* «И так, ставши на костях». С. 157.）、彼がこのことで述べるのは、社会における文学系のもつ機能の「自動化－異化」であり、「文学」ではなく「社会」の側からの視点で述べるといえる。

(3) バフチン及びバフチン・サークルにおける「エボリューション」

バフチン及びバフチン・サークルがフォルマリストの文学史を批判する際、一つの立脚点となるのはフォルマリストにおける「歴史的時間」の欠如である。П. メドヴェジェフ／バフチンのフォルマリズム批判の根幹は、フォルマリストの理論全体が「精神生理学的」カテゴリーである「自動化－感知可能性」の図式に、つまり「異化」の手法に依拠していることに向けられる。上に見てきた通り、文学史ですら史的時間を排除したかたちで作り上げていくフォルマリストの理論が、歴史的時間のカテゴリーを欠いているというメドヴェジェフ／バフチンの批判は正当なものであろう。メドヴェジェフ／バフチンの言葉で述べるなら、「フォルマリストの文学のエボリューションの理論全体は、ある本質的なモメントを欠いている—それは歴史的時間のカテゴリーであり、そのことは、フォルマリストの教説に関してわれわれが検討してきた全ての諸モメントの必然的な帰結である。／実際にはフォルマリストが知っているのは何らかの『永遠の現在』、『永遠の同時代性』のみである」[51]ということになる。

しかし、メドヴェジェフ／バフチンがみせる「エボリューション」という言葉への執拗なこだわりに、われわれは違和感を覚えずにはいられない。「既に述べたように、《エボリューション》という用語はフォルマリストの理論には適用できない。／実際、諸流派のこうした交替図式を、はたして内在的な文学のエボリューションと呼べるのだろうか？もちろん、否である。先行する形式のなかには、後続の形式のいかなるポテンシャルもなく、後続の形式へのいかなる暗示も予告もない」[52]、「闘争と交替は、決してエボリューションの原理ではない」[53]。メドヴェジェフ／バフチンがいう「エボリューション」とは、「二つの現象が本質的にお互いに結びつき、先行する現象が後続の現象を本質的かつ必然的に規定していること」[54]であり、それゆえ、文学史において「まったく無批判に、いかなる論理にも反して、交替をエボリューションと呼ぶ」トゥイニャーノフは、「文学には決してエボリューションが存在しないこと、文学を支配しているのは［メドヴェジェフ／バフチンがいうところの「エボリューション」とは］まったく別のタイプの交替であることを明らかにしようとする」こととなる[55]。そんなトゥイニャーノフが「弁証法的に」という言葉を用いることを、メドヴェジェフ／バフチンは容認できない。例えば、資本主義に対する否定がその懐のうちで生長し、社会主義をもたらすと述べたあとメドヴェジェフ／バフチンが、「デルジャーヴィンのオードを創造するような矛盾が、ロモノーソフのオードの中に堆積されていたということを、トゥイニャーノフは示さないし、示そうともしない」[56]と批判するとき、メドヴェジェフ／バフチンが念頭においている「エボリューション」は弁証法的であるといえる。

それと同時に、メドヴェジェフ／バフチンはトゥイニャーノフの「弁証法」を批判して、

---

51 *Медведев.* Формальный метод. С. 344.
52 Там же. С. 337.
53 Там же.
54 Там же.
55 Там же. 但し、『文芸学における形式的方法』において「文学のエボリューションについて」は言及されていない。
56 Там же. С. 338-339.

「もし否定が外部からであるなら、それは弁証法的な否定ではない」[57]と述べているわけであるが、ここで「弁証法」という言葉にこだわるならば、両者の齟齬は「文学」に対する「外部」の相違にあるといえるだろう。その意味でこの相違は、芸術の約束性（условность）に関するメドヴェジェフ／バフチンの態度にもあらわれている。「芸術の約束性」とは、メドヴェジェフ／バフチンにとって、そのイデオロギー的素材が社会的交通においてアクチュアリティを失ったときに発生するものであり（例えばエピゴーネンや紋切り型）、フォルマリストたちが主張しているような芸術が有している自律的システム、あるいはモスクワ＝タルトゥ学派によって後に提唱されるような第二次モデル形成体系としての芸術システムを意味しているわけではない。そのため、メドヴェジェフ／バフチンが説く「ジャンルの記憶」の重要性は、その発生論的意義に依拠することとなる。これはもちろん、手法の集合体としてジャンルを見なしていたフォルマリストとは異なる。メドヴェジェフ／バフチンがジャンルを重視するのは、ジャンルが固有の「内的な、テーマの面での一定性」を有していると共に、そのジャンルという形式においてこそ、直接的・本来的な所与の作品受容の仕方があらわれるからであり、換言すれば、諸々のジャンルの決定が「ファクトとしての言葉の、より正確には、周囲の現実における歴史的行為としての言葉の、直接的な方向性によって」[58]なされるからである。

それ故、よく知られているようにバフチンは1930年代以降、歴史詩学に向かうこととなる。このことは、1929年に書かれた『ドストエフスキイ作品の諸問題』における序文によくあらわれている。

> この本はドストエフスキイの作品における理論的問題にのみ限定している。全ての歴史的諸問題をわれわれは除外せざるを得なかった。しかしこのことは、そのような観察方法が方法論的に正しく正常であると考えていることを意味しない。反対に、それぞれの理論的問題は必ず歴史的に位置づけられなければならないと、我々は考えている。文学作品への共時的アプローチと通時的アプローチの間は連続的な結びつきと、強固で相互的な被制約性があるべきである。……この分析の基礎にあるのは、すべての文学作品はその内部において、内在的に社会学的であるという確信である。文学作品において生きた社会的な力が交差しているし、作品の形式のそれぞれのエレメントは生きた社会的評価によって貫かれている。[59]

歴史詩学を重視するバフチンの姿勢は、『ドストエフスキイ詩学の諸問題』においてこの序文に対応する部分が、「我々の通時的分析は共時的分析の結果を立証しているように思われる。より正確には、両者の分析の結果は相互的に互いを検討し、互いを立証している」[60]となっていることからも明らかである。バフチンの「文学作品はその内部において、

57　Там же. С. 338.
58　Там же. С. 308.
59　*Бахтин М.* Проблемы творчества Достоевского // *Бахтин.* Собрание сочинений в 7 томах. Т. 2. М.: Русские словари, 2000. С. 7.
60　*Бахтин М.* Проблемы поэтики Достоевского // *Бахтин.* Собрание сочинений в 7 томах. Т. 6. М.: Русские словари языки славянской культуры, 2002. С. 201. 邦訳としては以下を参照。新谷敬三郎訳『ドストエフスキイ論：創作方法の諸問題』冬樹社、1968年；望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房、1995年。

内在的に社会学的である」という確信は、第一章で述べたエイヘンバウムによる「素材は独自の特殊な社会学をもっている」とは異なっている。前者においては、既に常に社会的交通においてのみ文学作品が存在しているのであるからこそ社会学的なのであり、後者においては、文学系に関すブィトに限定する литературный быт に依拠した独自の社会学が目指されるのである。更に、上の序文で指摘しなければならないのは、バフチンが共時的アプローチと通時的アプローチの結合を謳いながら、前者を「理論的」、後者を「歴史的」と考えていることだ。『ドストエフスキイ詩学の諸問題』において大幅に追加されたのが歴史詩学的ジャンル論（カーニバル論）であったことが示すように、また引用にある「それぞれの理論的問題は必ず歴史的に位置づけられなければならない」や、「(歴史的観点は)検討するそれぞれの現象を、我々がそこにおいて知覚するような背景となる」[61]と述べていることからも明らかなように、バフチンは「歴史」がその文学作品の「意味」を支える、つまり、通時的アプローチが共時的アプローチを支えると考えている。バフチンにおいて文学作品を規定することとなる「歴史」は、そこから文学ジャンルが発生するところの起源として扱われる。それにより文学作品は、文学史に固有な時間ではなく、外的な（社会的な）時間と相関させられる契機を孕むこととなる。

文芸学においてバフチンがとった戦略は、後に『ドストエフスキイ詩学の諸問題』において提唱される「メタ言語学」の素材として文学作品を扱うということにある。イデオロギー的・文化的諸ジャンルにおける「言葉」を、同一平面で捉えることができるからこそ、詩ではなく小説を、彼はその素材に選んだといってもよい[62]。このことはB. ヴォロシノフ／バフチン『マルクス主義と言語哲学』においてなされたソシュールに代表される客観主義的言語観への批判と、メドヴェジェフ／バフチン『文芸学における形式的方法』におけるフォルマリズムへの批判との類似性をみれば明らかであろう。バフチンの文芸学は、「出来事としての発話」という「メタ言語学」的視点から展開される。その根幹には、共時的には社会的交通としてことばが存在し、通時的には文学作品が「歴史」において存在するというイデーが存在する。そして、『ドストエフスキイ詩学の諸問題』においては、バフチンにとって通時的アプローチであるジャンル論としてのカーニバル小説（＝歴史詩学的観点）が、共時的研究であるドストエフスキイ小説におけるポリフォニー（＝メタ言語学的観点）を支えることとなる。

もちろん、バフチンは反映論者ではない。ジャンルを措定し、その特徴を述べる彼は、その起源を経済的基盤に求めることはしない。しかし彼は、例えば「メニッペアのジャンルは、恐らくそのエポックの諸特性のきわめて適切な表現なのである」[63]という表現や「ポリフォニー小説の本質的な多次元性と多声性のための客観的前提」[64]として資本主義を挙げる点に見られるように、反映論と解されなくもない文学史観を述べることもある。そして、メドヴェジェフ／バフチン『文芸学における形式的方法』でのフォルマリズム批判お

61 *Бахтин.* Проблемы творчества. С. 7.
62 *Бахтин М.* Слово в романе // *Бахтин.* Вопросы литературы и эстетики. М.: Художественная литература, 1975. С. 104-105. 邦訳は、伊東一郎訳『小説の言葉』平凡社、1996年。
63 *Бахтин.* Проблемы поэтики. С. 135.
64 Там же. С. 26-27.

よび文芸学は、例えば内容／形式という概念の不備を指摘されながらも、文学の社会学を目指している点でマルクス主義陣営の支持を得ることとなる[65]。

(4) ヤコブソンにおける「エボリューション」

『新レフ』1928 年第 12 号に掲載されたトゥイニャーノフとヤコブソンによるテーゼ「文学研究および言語研究の諸問題」を、フォルマリズムの到達点と看做すこともできるだろう[66]。このテクストは、T. ベネットも述べているように、ヤコブソンや、彼が当時活動拠点としていたプラハ言語学サークルの理論を強く反映し[67]、一般に後の構造主義への道を開いたものとして解釈されている。それ故、『文学の立哨中』1927 年第 10 号に、「文学のエボリューションについての問題」のタイトルで掲載されたトゥイニャーノフによる「文学史」は[68]、より洗練された形で、ヤコブソンとの共著によるテーゼへ発展、昇華していると考えられがちである。しかし、本論では、「テーゼ」に回収され得ないトゥイニャーノフの「文学史」を検討する。そのために、われわれに必要な範囲でヤコブソンによる（言語の）「エボリューション」を概観しておこう。

妻ポモルスカとの対談でヤコブソンが「時間それ自体がわれわれの時代の最重要の問題でしたし、いまもそうであると思われます」と語っているように[69]、彼は広く流布している「スタティックな構造」という観念そのものを疑問視していた。実際、彼が随所で述べているソシュール批判は[70]、共時態／通時態を、静態／動態や体系的／偶発的、また目的論的／機械論的とイコールで結んでしまったことに向けられている[71]。相対性理論やキュビズムに依拠しながら 1919 年に未来派を論じている彼は、元来、「静態」とは無縁であった[72]。そんなヤコブソンの言語史研究の方法論における要は、当然、共時態を動態として扱うことにある。

---

65 *Добрынин М.* Рецензия на «Формальный метод в литературоведении» // Печать и революция. 1929. № 4. С. 123. 同じ執筆者による『文芸学における形式的方法』における概念としての「イデオロギー」へ向けられた批判は、*Добрынин М.* Вопросы теории литературы // Литература и марксизм: журнал теории и истории литературы. Кн. Первая, 1929. を参照。

66 *Тынянов Ю. и Якобсон Р.* Проблемы изучения литературы и языка // Новый Леф. 1928. № 12.

67 T. ベネット著、鈴木史朗訳『マルクシズムとフォルマリズム』未来社、1986 年、69 頁。

68 *Тынянов Ю.* Вопрос о литературной эволюции // На литературном посту. 1927. № 10.

69 R. ヤコブソン著、浅川順子訳『言語芸術・言語記号・言語の時間』法政大学出版局、1995 年、13 頁。

70 例えば、「一方では**共時態**と**静態**と目的論の適用領域とを同一視し、他方では**通時態**と**動態**と**機械論的因果関係**の範囲とを同一視する試みは、共時態の枠を不当に狭め、史的言語学をちぐはぐな事実の集積と成し、共時態の諸問題と通時態の諸問題との間に深淵があるという皮相的かつ有害な幻想を作りだしているのである」（R. ヤーコブソン著、長嶋善郎訳「史的音韻論の諸原則」『ロマーン・ヤーコブソン撰集 2：言語と言語科学』大修館書店、1978 年、28 頁）。またヤコブソンに関する記述は以下も参照した。E. ホーレンシュタイン著、川本茂雄訳『ヤーコブソン：現象学的構造主義』白水社、1983 年。

71 但し、このようなソシュール批判はあくまでヤコブソンによるソシュール批判である。あるいはバイイ／セシュエによって編まれた『一般言語学講義』批判であるといってもよい。現在では、ソシュール草稿の読解を通した前田英樹他によって、新たなるソシュール像が提起されている（前田英樹『沈黙するソシュール』書肆山田、1989 年）。

72 *Якобсон Р.* Футуризм // *Якобсон.* Работы по поэтике. М.: Прогресс, 1987.

音韻論では、青年文法家連の個別的方法とは反対に**全体的方法**を採る。すなわち、個々の音韻論的事実を一つの部分的全体として扱い、この部分的全体が種種の度合いで上位にある他の部分的全体と有機的に関連づけられているものとして扱うのである。かくして、史的音韻論の第一原理は次のように規定される：**すべての変化は、その変化が生じた体系との関連において扱わなければならない**。音変化は、その言語の体系内におけるその役割を明らかにしなければ理解できないのである。[73]

音韻体系内である音変化が生じたとき、その音韻体系全体を精査する必要があるのであり、それによりはじめて音韻変異[74]を正当に解釈することが可能となる。変異の前後という二つの言語状態についての資料が揃い、変異の方向と意味という問題が立てられると「我々は通時態の領域から共時態の領域に移行することとなる」[75]。そして、ヤコブソンがこの言語変異を解釈するとき依拠するのが、目的論的思考である（「我々がある言語変異を言語的共時態という脈絡の中で考察する時、我々はその言語推移を目的論的諸問題の領域に導入することになる」[76]）。その目的論とは例えば、「変異に先立って破られた体系の均衡を回復するため」という原則としてあらわれる。但し、この体系の均衡の回復の目的に則らない、統計学によってしか限定し得ない言語進化にも、ヤコブソンは注意を促している（「言語進化における統計的要因の役割を過大評価することは危険な単純化であろうが、他方、我々は、量から質への移行という弁証法的法則が言語進化に寄与していることも忘れるべきではない」[77]）。これがヤコブソンの「エボリューション」である。このようなヤコブソンの「エボリューション」に関してわれわれが指摘しなければならないのは、彼の目的論とそこから派生する共時態の捉え方、そして「ファンクション」の問題である。

結果的な資料として提起される変化（＝変異）は通時態に属し、その変化のスパンを共時的観点から捉えることによって、ヤコブソンは共時態の中に通時態を組み込む。例えばロシア語音韻体系におけるアーカニエは、それが成立するまでに音声学的にはいくつかの中間段階が存在したかもしれないが、音韻論的には変異前の音韻体系と変異後の音韻体系しか存在しない[78]。そのように生成を問題にしないという意味で、ヤコブソンは構造論的であるといえる。そこで、変異の結果を基礎付けるために要請されるのが、彼の「目的論」なのである。先の引用にある「部分と全体」という階層性も、そのことを示している。

73　ヤーコブソン「史的音韻論の諸原則」11 頁。なお、引用強調中、「体系との関連において」の原語は、“en fonction du système” であり、「システムとの関係において」と訳せるわけだが、続く文章の「役割」からも明らかなように、ヤコブソンは「機能」に力点を置いていることがわかる（R. Jakobson, “Principes de phonologie historique,” in Jakobson, *Selected writings I: Phonological Studies* (The Hague: Mouton, 1962), pp. 202-203.）。

74　「変異」の原語は mutation である。この言葉をヤコブソンが用いる理由が、「音韻変化が飛躍的に進むということを強調するためである」ことから、本論では「変異」の訳語を用いる（ヤーコブソン「史的音韻論の諸原則」、13 頁）。

75　同上、26 頁。

76　同上、26 頁。

77　同上、21 頁。

78　同上、13-14 頁。

ヤコブソンが動態を共時態に組み込むことによって仮構したのは[79]、ホメオスタティックな動的平衡系、つまり外部観測者的な立場から認識することができる、そのシステム（＝言語体系）に対する入力と出力の流れにおいて、ゆらぎを解消しながら自らを維持するシステムであるといえる。そういった形の目的論的思考により、彼は時間を消去した。あるいは、より精確に述べるなら、彼は時間を、ただ言語が変遷するための環境としてのみ捉えているということになろう。ヤコブソンの操作は、「変異」という単位で共時的な切断面を設定することにより、言語史に固有の時間を模索しているようでありながらも、環境として存在する直線的な時間観を背景としているのだ。

この目的論的志向は、ヤコブソン独自のものというよりは、むしろ、プラハ言語学サークルにおいて共有されていた理論的基盤であった。1929 年に発表された「テーゼ」を確認しておこう。

a）言語が機能的体系であるという考え

人間の活動の所産であるから、言語はこの活動と目的性という性格を共有している。言語活動を表現あるいは伝達として分析する場合、容易で最も自然な説明は、言語主体の意図である。それ故に言語学の分析においては、機能的見地を考慮しなければならない。この観点からすれば、言語は、目的に適合せしめられた、表現手段の体系である。……[80]

目的論的な観点から、言語活動の目的を発話者の意図の伝達とすることで、「ファンクション」という言葉が、「機能」という意味で固定される[81]。このような機能の諸体系が様々なレベルで階層的に認められるという見地から、以後ヤコブソンは自らの言語論を精力的に展開していくこととなる。ここから 1960 年頃に彼によって定式化されるコミュニケーション図式の六要素とそれに対応する六機能までの距離はほとんどない。また、この意味での「機能」は、当然、チェコ構造主義、特にムカジョフスキイが提起した「美的機能」に直結する。しかしわれわれは、この「ファンクション」という概念の捉え方の違いから帰結される、ヤコブソンとトゥイニャーノフの差異を考察していく。それは、フォル

79　ヤコブソンは、その動態的な共時態を説明するときにしばしば映画の比喩を用いる。例えば、「映画を見る時、その画面の知覚を通時的にだけでなく、共時的にも捉えることができる。しかしながら、ある映画の共時的側面とは、フィルムから取り出した 1 コマの孤立した映像と同じではない。動きの知覚は共時的側面においても存在する。言語についても同じことである」（同上、26 頁）。このとき彼が想定しているのが、何らかの意味的単位を措定することにおいてのみ、抽出できる「共時態」であることは明確である。

80　テーゼのこの部分は、ヤコブソンの手による（山口巌『パロールの復権：ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語美学へ』ゆまに書房、1999 年、351 頁）。なお、プラハ言語学サークルの「テーゼ」の引用は基本的に山口に依拠したが、ロシア語訳を参照しながら必要に応じてタームを代えた（Тезисы Пражского кружка // *Кондрашов Н.* (сост., ред. и предисловие) Пражский лингвистический кружок: сборник статей. М.: Прогресс, 1967. С. 17-41.）。

81　「ファンクション」という言葉に関して、ヤコブソンは 1962 年付で以下のように述べている。「function という同音異義語―手段＝目的の角度から見た「機能、役割」という意味の function と、数学における 2 つの変数の対応としての「関数」という意味での function と―は、しばしば混同して用いられており……」（R. ヤーコブソン、早田輝洋訳「言語の手段＝目的モデルに向けられた両大戦間のヨーロッパ言語学の活動」『ロマーン・ヤーコブソン撰集 2：言語と言語の科学』97 頁）。

マリストの成果を批判的に発展・継承したチェコ構造主義という文脈[82]に回収されない地点で、トゥイニャーノフを読み直すということである。

フォルマリズムの到達点といわれる「文学研究および言語研究の諸問題」が「ヤコブソン的」であると考えられるのは、「ファンクション＝機能」の観点からであり、それは例えば、「文学研究および言語研究の諸問題」が『新レフ』1928 年第 12 号に掲載されたときの冒頭におかれた、編集者による次のような文章にもあらわれる。部分的に引用しよう。

> 言語と文学に関する現代の学問は、この［これまでの学問が行ってきた］理論と歴史の対立を除去している。というのは、理論的分析は、史的弁証法（文学的・言語的な値の経過と変化）を考慮することなくしては不可能であるし、また反対に歴史的研究は、理論において素材の特殊性を意識することなくしては、実り豊かなものとなり得ない。
>
> 古い学問の「なぜ？」という問いの代わりに、前面に出ているのは「なんのために？」という問いである（機能性［функциональность］の問題）。研究する必要があるのは、構成的機能（文学的ファクトを形成するエレメントの機能）や様々なジャンルの文学外的な機能だけでなく、様々な時代における文学系の社会的機能もである。
>
> 従って、言語と文学についての学問は自然科学的ディシプリンのカテゴリーから、社会的、というよりは社会学的なディシプリンのカテゴリーへと移行しつつある。[83]

われわれがここで確認しておきたいのは、この編集者（シクロフスキイ？）が理解するように、「文学研究および言語研究における諸問題」の функция は「機能」であるということである。

一方、トゥイニャーノフにおける функция は「関数」と捉えるべき概念である（例えばトゥイニャーノフは「文学のエレメントそれぞれのファンクションとは、他の諸エレメントとの、また全体の構成的原理との相関性である」、「それぞれの作品のファンクションは、他の諸作品との相関性である」と述べている[84]）。このことは ПИЛК の註釈者たちや桑野も指摘しているが[85]、「文学的ファクト」や「文学のエボリューションについて」がその

82 例えば、*Лотман Ю.* Ян Мукаржовский – теоретик // *Лотман.* Об искусстве. СПб.: Искусство, 1998.

83 Новый Леф. 1928. № 12. С. 36.

84 *Тынянов Ю.* Предисловие // *Эйхенбаум Б. и Тынянов Ю.* (ред.) Русская проза: сборник статей. Л.: Academia, 1926. С. 9.

85 注釈者たちは、「文学研究および言語研究における諸問題」における функция の意味の相違を、プラハ言語学サークルと先行するトゥイニャーノフの諸論文との差異として指摘し（ПИЛК. С. 528, 535.）、桑野は更に、「機能」に関してトゥイニャーノフとヤコブソン間に微妙な相違があることを指摘している（桑野隆『ソ連言語理論小史：ボードアン・ド・クルトネからロシア・フォルマリズム』三一書房、1979 年、155-161 頁）。また、функция の用いられ方を、日常言語／詩的言語区別に基づく初期フォルマリスト言語学、トゥイニャーノフによる文学研究の用語、そしてチェコ構造主義のムカジョフスキイの美学、これらの三つ領域においてそれぞれ考察したものとしては、H. Günter, “Функция,” *Russian Literature* XXI (1987). を参照。

ような観点から主題的に読み返されることは少ない[86]。但し、桑野も指摘しているように、トゥイニャーノフにおける функция には「機能」と訳出すべき箇所も多数あり、そのことが、彼の著作を曖昧化している要因の一つでもある。彼の функция は、文学作品が個別的・具体的に検討される際には「機能」のニュアンスを強く帯び、そのような事例を抽象化し導かれる理論的部分においては、「関数」の意味を帯びると、大雑把に述べることができよう。以下では後者を中心に論じるので、「関数」というニュアンスを最大限に活かして考察していきたい。

ヤコブソンを検討しながらここまで述べてきた「機能」とは、上に引用した編集者の言葉にもあるように、「何のために」と言い換えることができる。それは階層を形成し、任意の階層の諸エレメントの目的は、その階層の外部（メタレベル）に存することになる。一方「関数」とは、関係性そのものであり、上位レベルに対して目的論的な色彩を帯びることはない。つまり、「関数」を基盤に論を展開するということは、徹底的に内在的であるということであり、これは литературный быт と литературный факт とを比較した時に述べたこととパラレルである。そしてここにおいてこそ、トゥイニャーノフは「文学のエボリューション＝文学史」を模索したのであり、結果としてそれは、彼独自の文学史固有の時間をわれわれに提示することとなる。

2. トゥイニャーノフにおける「文学のエボリューション」

(1) 反目的論、そして「ファンクション」

以下、トゥイニャーノフによる「文学のエボリューション」について考察していく。前節に引き続き、まずは「目的論」の問題から述べていこう。

「文学のエボリューションについて」においてトゥイニャーノフは、目的論を完全に拒否している。彼の言葉を引けば、「目的論的な、目的をもったニュアンスを、《意図》を、《志向［установка］》という言葉から抹消しよう」[87]というわけだ。この文章のあと、ロモノーソフと雄弁術との関係についてトゥイニャーノフは論を展開させるのだが、それはわれわれに彼の「雄弁術ジャンルとしてのオード」を参照することを促す。そこでこの1922年付の論文に目を向けてみると、トゥイニャーノフによる註釈にも同様のことが書かれている（「《志向》という用語から目的をもったニュアンスを取り去る必要がある。ファ

86　「ファンクション＝関数」という観点からトゥイニャーノフを読解しているものとしては、スタイナー『ロシア・フォルマリズム』100-142頁がある。そこでは次のように表現されている。「カッシーラーとトゥイニャーノフの理論にはいくつかの明白な接点がある。もっとも重要な点は、かれらが数学関数を概念形成一般のモデルとして用いたという事実である。……関数の概念は［カッシーラーが言うには］『数学だけに限定されることなく、自然についての知識の分野にも敷衍されうる』。カッシーラーの先導をえて、トゥイニャーノフはこの境界をも踏みこえ、関数の概念を文化現象の研究にまで適用した」（同書、103頁）。以下でわれわれが展開するトゥイニャーノフの読解とスタイナーのそれとは大いに重なるが、彼が「文学史」の問題を通してトゥイニャーノフの文学理論を捉えるのに対し、われわれはその「文学史」の理論そのものが孕んでいる問題に焦点をあてる。

87　ПИЛК. С. 278. なお、この論文の邦訳は以下を参照。磯谷孝訳「文学的発展について」新谷ほか編『ロシア・フォルマリズム論集』；小平武訳「文学の進化」水野編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』；松原明訳「文学の進化について」桑野ほか編『ロシア・アヴァンギャルド6』。

ンクションの概念は、目的論の概念を取り除く」[88])。これらの目的論の排除は、穏当且つ正確にいうなら、トゥイニャーノフにとっては「作者の意図の排除」とほぼ同義であり、個人レベルを越えた、つまりヤコブソンのような目的論についてトゥイニャーノフは触れていない。しかしわれわれは、トゥイニャーノフの「作者の意図の拒否」を、ヤコブソン的な目的論も拒否せざるを得ないものとして拡大解釈する[89]。そこで、「志向」と密接な関わりのある、「ドミナント」の問題に触れておこう。

「雄弁術ジャンルとしてのオード」でトゥイニャーノフは、シクロフスキイによる初期フォルマリズムのテーゼ的な言葉である「手法の総体」を否定し、文学作品とは、その個々の要素・側面が相互関係にあるシステムだと述べる。そして、「それぞれの要素と他の諸要素との相関関係は、システム全体に対するその要素のファンクションである」[90]としている。そのシステムにおいて、残りの諸要素を従わせるようなある要素、それを彼はエイヘンバウムやB. クリスチアンゼンに倣って「ドミナント」としているわけだが、そのようなドミナントは、決して実体的に固定されたものではなく、任意のエポックにおいてドミナントであったものが、別のエポックでは従属的な要素になることもある。つまり、「作品内部においてもファンクションの転換」が起こる[91]。

その後、「文学のエボリューションについて」でも述べられている「隣接的な文学外系」について、トゥイニャーノフは述べている。

> 文学システムが相関しているのは、隣接的な文学外系、つまりことば［речь］であり、隣り合うことばの芸術の素材とブィトのことばの素材である。如何に相関しているのか？　換言すれば、どこに文学系の隣接的な社会的ファンクションがあるのか？　ここで、《**志向**》という用語が独自の意義を得る。《志向》は、従属的諸要素にファンクション的な彩りを与える、作品（あるいはジャンル）のドミナントであるだけでなく、それと共に隣接的な文学外系、ことばの［речевой］系に対する作品（あるいはジャンル）のファンクションでもある。[92]

ここまでのトゥイニャーノフの用語を整理しておくと、まず、「ドミナント」は「志向」とイコールではない。「志向」とは、作品内部で働く「ドミナント」であると同時に、個々の作品の外部、すなわち文学外系に対する「ファンクション」でもある[93]。それ故、ロモノーソフの修辞学における説得から熱狂への移行は、「詩的でない［внепоэтический］こ

88　ПИЛК. С. 228.

89　ハンゼン＝レーヴェも、このようなトゥイニャーノフの「非目的論」を重視し、次のように述べている。「この定義においてトゥイニャーノフは、……特にヴィノグラードフやヴィノクールらの理論的言説における「志向＝ intention」についての「目的論的」理解と、フォルマリスト的な、あるいは、より正確には、構造主義的**機能主義**の理解とを区別している」（Aage A. Hansen-Löve, “ ‘Установка’ (‘Intention,’ ‘Einstellung’),” *Russian Literature* XXIV (1988), p. 172.）。

90　ПИЛК. С. 227.

91　Там же.

92　ПИЛК. С. 228.

93　それ故、ヤコブソンにおける「ドミナント」は、それを文学作品内部に限定しないという点でトゥイニャーノフにおける「志向」に近いと考えられるであろう（R. ヤーコブソン著、岡田俊恵訳「ドミナント」桑野ほか編『ロシア・アヴァンギャルド6』）。

とばの系、つまり雄弁術への志向を伴った、詩のジャンルの雄弁術的な組織化に、オードの組織化に影響する」[94]ことになる。また、時代が下りカラムジンに至るまでに「オードは文学的に《使い古されていた》」ので、サロンのことばの系が志向されることになる[95]。これらトゥニャーノフの考察が示すのは、文学外系に対する「志向」が文学系にフィードバックすることにより、「ドミナント」が発生するということである。そして、カラムジンがサロンのことばを「志向」しているとしても、「サロンはブィト的ファクトであるが、このとき［文学に取り込まれたとき］文学的ファクトとなる」[96]ということが重要である。つまり、「志向」という用語を用いながらもトゥイニャーノフのそれは、このような形で文学外（系）への目的論を巧みに回避しているといえる。

このことからも明らかなように、トゥイニャーノフの「ファンクション」は、確かに彼が具体的な事例を検証する際には「機能」と訳出するのが適当である場合があるにもかかわらず、常に「関係性」のニュアンスが根底にある。具体的な「機能」は、「関係性」から二次的に派生するということもできるだろう。

「志向」と類似的な発想をしたものに、「文学のエボリューションについて」で提起された重要な概念、《синфункция/ автофункция》がある。

> ［文学作品を構成している］エレメントは同時に相関するのだ。一方で、他の諸作品＝諸システムのいくつもの類似的なエレメントに対して、また他の諸系に対してさえも相関し、他方で、そのシステムの他の諸エレメントと相関する（オートファンクションとシンファンクション）。
>
> 例えば、ある作品の語彙は同時に、一方で文学的語彙と一般的なことばの語彙とに相関し、他方でその作品の他の諸エレメントと相関する。これら二つのコンポネント、より正確には、等しく活動しているファンクションであるこれら二つは、非均質である[97]。

トゥイニャーノフの「志向」が、その作品におけるドミナントと同時に、文学外系とのファンクションを示していたように、ここでは、文学作品を構成する諸エレメントが、作品外部との相関をあらわす「オートファンクション」、作品内部との相関をあらわす「シンファンクション」として捉えられている。これらの概念は、ソシュールの提起した概念にそって註釈者たちによって次のように解釈されている。「トゥイニャーノフに従えば、それぞれの作品はシステムであり、作品は同時に、ラングとしても、また『全文学』との関係においてパロールとしてもあらわれる。オートファンクション、それはパラディグマ的な要素のパラメータであり、シンファンクションはシンタグマ的な要素のパラメータである」[98]。この読解が、後のトゥイニャーノフ解釈に与えた影響は大きい。恐らく注釈者たちが意図しているのは、「オートファンクション＝ラングと作品におけることばとの相関性＝連合的＝パラディグマ的」、「シンファンクション＝パロールとしての作品におけるこ

94　ПИЛК. С. 229.
95　ПИЛК. С. 278.
96　ПИЛК. С. 279.
97　ПИЛК. С. 272.
98　ПИЛК. С. 523.

とばの相関性＝連辞的＝シンタグマ的」ということであろう。この註釈の前半において提示される認識（すなわち、作品は「ラングとしての作品」であると同時に「（文学系に対する）パロールとしての作品」であるという認識）にもかかわらず、オートファンクション／シンファンクションをパラディグマ的／シンタグマ的と捉えるのは、そのレベルにおいては正当であるものの、あまりにも禁欲的すぎるといわざるをえない。

それ故、われわれは踏み出そう。様々なレベルを設定するトゥイニャーノフは、オートファンクション／シンファンクションによって、より一般的なレベルでの外部／内部それぞれの相関を射程に入れていると考えるべきである。トゥイニャーノフにおいて重要なのは、ファンクションという概念を細分化し、所与のレベルにおける外部と内部をファンクションによって一元化することである（「他の諸系に対してさえも」と彼が述べていることを思い出そう）。この「一元化」にも関連することであるが、ソシュールの概念を文学研究に導入するという観点から、B. ヴィノグラードフは「**諸システム内部の相関の諸形式と、諸システム間の相関の諸形式、それらは異なる次元の現象である**。それゆえ、あるシステムの諸エレメントの、そのシステムの他のメンバーとの相関と、また他のシステムの『類似的な』諸エレメントとの相関とが同時的に可能であるということは、正しくない」とオートファンクション／シンファンクションに対して正当な批判を加えている[(99)]。しかし、われわれは「同時的に可能である」というトゥイニャーノフの一元化の意義を最大限引き出したいのである。繰り返すが、トゥイニャーノフの上の引用を敷衍するなら、あるエレメントの、それが所属するシステム内部における相関がシンファンクションであり、あるエレメントの、それが所属するシステム外部との相関がオートファンクションである。

このことは、オートファンクション／シンファンクションに関する先の引用にある「等しく活動しているファンクションであるこれら二つは、非均質である」という言葉からも窺える。どのように「非均質」であるかということに関して、トゥイニャーノフは次のように述べている。「オートファンクションは決定せず、それはただ可能性を与え、それはシンファンクションの条件である」[(100)]、「オートファンクション、すなわち、他の諸システムや他の諸系の類似したいくつものエレメントと、何らかのエレメントの相関関係は、シンファンクションの条件であり、そのエレメントの構成的ファンクションの条件である」[(101)]。これらから明らかなのは、オートファンクションがシンファンクションの条件となることであり、われわれが確認したいのは、これが、自動化や「規範」を背景としてのみ成立する、異化の論理に類似するということである。より精確には、これら概念によってトゥイニャーノフが行っているのは、異化の論理において自動化や「規範」として捉えられ、通常、（具体的にはジャンルや文化的・社会的コンテクストといった）作品の外部にあると考えられる要素を、オートファンクションによって文学（研究）に取り込むことであると考えられるのではないか。つまり、シクロフスキイの「異化」の基盤が、根本的に

99 *Виноградов В.* О художественной прозе // *Виноградов.* О языке художественной прозы: избранные труды. М.: Наука, 1980. С. 88. ヴィノグラードフは、ラング／パロールという言語学の用語が、文学研究において誤って利用されていることを指摘し、直接的にトゥイニャーノフの名を挙げている（Там же. С. 89.）。

100 ПИЛК. С. 273.

101 ПИЛК. С. 274.

は受容者の精神生理学的カテゴリーに置かれているのに対し[102]、トゥイニャーノフは文学をシステムとすることにより、その基盤を文学そのものへと差し戻したといえる[103]。

トゥイニャーノフの「文学史」を検討するわれわれにとってこのことが重要なのは、彼の「文学のエボリューション」のメカニズムが、基本的に「自動化－異化」の交替図式に依拠しているからだ。オートファンクション／シンファンクションによって提示されたこの観点を念頭に置きながら、われわれはトゥイニャーノフと共に、その交替図式を読み換えていく必要がある。

(2)「文学のエボリューション」のメカニズム

まず、「文学のエボリューションについて」の最後の部分を引用する。

> まとめよう。文学のエボリューション研究が可能となるのは、他の諸系や諸システムと相関させられ、それらによって条件付けられている、系やシステムとしての文学を扱うことによってのみである。検討は、構成的ファンクションから文学的ファンクションへ、文学的ファンクションからことばのファンクションへと、向かわなければならない。それはファンクションと形式のエボリューション的相互作用を解明しなければならない。エボリューションの研究は、文学系から隣接する相関関係にある諸系へ歩みを進めなければならないのであって、主要であっても最も遠い系へ向かうのではない。[104]

ここで述べられているのは、エボリューションそのものの仕組みではなく、構成的ファンクション（文学作品内部における相関関係）、文学的ファンクション（文学系における相関関係）、ことばのファンクション（文学系に隣接するところのことばの系における相関関係）という異なるファンクションにおけるエボリューションを検討する必要性である。例えば、トゥイニャーノフが提起した重要なテーゼとして、彼が俗流マルクス主義的な反映論を否定し、且つ文学作品を孤立化させる「内在的」方法を批判しつつ[105]、文学研究を社会的なものに開いていくために、文学研究に関係するブィトの諸系を、文学系に隣接する系、すなわちことばのファンクションに限定したことが挙げられるわけだが[106]、これは

102　但し、シクロフスキイはその活動の比較的早い時期にジャンルの問題へと移行しているので、一概に（個人的知覚のレベルでの）「精神生理学」とは言い切れないのだが、トゥイニャーノフが文学をシステムとして規定したほどの明確さを有してはいない。例えばトゥイニャーノフの次のような記述を参照。「このジャンルの感覚は、受容者の恣意に依っているのではなく、何らかのジャンルの優勢か、あるいは何らかのジャンルの存在一般に依るものである」（ПИЛК. С. 257.）。なお、シクロフスキイを中心としたジャンル論に関しては、佐藤「ヴィクトル・シクロフスキイ：規範の破壊者」73-83 頁を参照。

103　当時は出版されることのなかった「パロディについて」において、トゥイニャーノフは文学システムの自律性に関して以下のような注釈を付している。「システムという言葉の代わりに、『読者の知覚』という言葉をここに置くことはしたくない。……ある文化的・社会的システムにおける書き手は、異なるシステムの書き手よりも、同じシステムにおける読者に近い。『読者の知覚』に関する問題が発生するのは、所与の問題に対してただ主観的・心理学的関係においてであって、システム＝ファンクション的観察においてではない」（ПИЛК. С. 294-295.）。

104　ПИЛК. С. 281.

105　ПИЛК. С. 273.

106　ПИЛК. С. 278.

литературный факт や、オートファンクションといった概念と同様に、文学外系を如何に文学系に取り込み分析対象とするか、そのための理論的前提であり、決してエボリューションのメカニズムを説明するわけではない。

実は、このエボリューションのメカニズムという点では、トゥイニャーノフは「文学のエボリューションについて」において、明確に述べているわけではない。例えば、「もし、エボリューションがシステムの要素［член］の相関［соотношение］の変化、つまりファンクションと形式的諸要素の変化であると仮定するならば、エボリューションはシステムの《交替》ということになる」(107)と述べ、また別の論文では「文学のエボリューションの法則は、ファンクションと形式の交替の法則である」、「文学のエボリューションは交替の概念を用いなければならない」(108)として、エボリューションを「システムの交替」として捉える重要な認識を示してはいるが、エボリューションの仕方を述べているわけではない。

エボリューションのメカニズムに関して、最も明確に定式化されるのは「文学的ファクト」においてである。例えば、「不断の変動［динамика］の要求がエボリューションを引き起こす。なぜなら、ダイナミックなそれぞれのシステムは必ず自動化し、対立する構成原理が弁証法的に現れてくるからである」(109)、「1．自動化された構成原理との関係で、弁証法的に対立する構成的原理が現れてくる、2．その原理の適用が進む。構成的原理は最も容易な適用を求める、3．その原理が最も大多数の現象へと拡大していく、4．その原理が自動化し、対立する構成原理を呼び起こす」(110)。そう、基本的にシクロフスキイが「ローザノフ論」で提起した「自動化－異化」の交替図式である(111)。但し、ここでわれわれが確認すべきは、シクロフスキイが「文学史」に直面したとき、「交替」を捨象し、「弁証法」に向かったのに対し、トゥイニャーノフが向かったのは「システムの交替」であったということだ。それ故、「文学のエボリューションについて」における「志向」や「オートファンクション／シンファンクション」を検討してきたわれわれは、翻って「文学的ファクト」で定式化されたメカニズムを、「文学のエボリューションについて」に則して解釈しなければならない。そのために、両論文の間にある微妙な相違を検討しよう。

まず、上の引用で構成原理＝構成的原理とは、いわゆるドミナントと同義的だと解釈できる(112)。トゥイニャーノフにとって文学のエボリューションとは、この構成原理の交替

107　ПИЛК. С. 280-281.

108　*Тынянов.* Предисловие // Русская проза. С. 10.

109　ПИЛК. С. 261.

110　ПИЛК. С. 262.

111　「**何らかのジャンルが崩壊するエポックには、そのジャンルは中心から周辺へ転位し、一方その代わりに文学の瑣末な部分から、文学の末端や低いところから新しい現象が中心へと滑り込んでくる**（これはヴィクトル・シクロフスキイの語る「若いジャンルの規範化」の現象でもある）」（ПИЛК. С. 257-258.）。

112　「それぞれの構成原理は、これら構成的諸系の内部で何らかの具体的な諸結合を定め、従属的な要因に対する構成的要因の関係を定める」（ПИЛК. С. 261.）、「このダイナミズムは構成的原理の概念においてあらわれる。言葉の全ての要素が等価値的であるのではない。ダイナミックな形式は、結合でもそれらの融合でもなく（しばしば用いられる概念《照応》を見よ）、それらの相互作用によって、従って、他を犠牲にしたある諸要素のグループが突出することによって形成されるのだ」（*Тынянов.* Проблема стихотворного языка.〔前注 29 参照〕С. 34.）。

である[113]（「従って、「構成的要因」と「素材」が、ある構成にとって恒常的な概念であるのに対し、「構成的原理」は常に変化し、複雑で、エボリューションする概念である」[114]）。しかしここで指摘したいのは、興味深いことに「文学のエボリューションについて」では、構成原理／構成的原理というタームは用いられず、その代わりに「構成的ファンクション」となっていることだ[115]。この異同は、「原理」ではなく、「ファンクション」とすることにより、常にそれが相関的な概念であることをトゥイニャーノフが強調するためであると考えられる。また、「文学的ファクト」や『詩作品の言語の問題』などにおいて頻繁に用いられていた「ダイナミック」というタームも、「文学のエボリューションについて」では使われていない。トゥイニャーノフは、関係性を示す「ファンクション」という概念で自らの理論を統一することにより、これらタームを用いる必要がなくなったのだといえるだろう。

また、「文学的ファクト」で示された上の「自動化－異化」に準拠する交替図式は、（「文学のエボリューションについて」の用語でいえば）構成的ファンクションを問題にしているわけだが、その「異化」を促す「新しい」構成原理は同論文において「ブィト」から持ち込まれることになっている（「そこで新しい構成原理が、新鮮で、自らに近いブィトの諸現象にぶつかるのである」[116]）。例えばそれは手紙や新聞・雑誌という形式だ。しかし、「文学のエボリューションについて」においてトゥイニャーノフは歩みを進め、この「自動化－異化」の交替図式をより一般化させている。彼は「なんらかのエレメントの《自動化》とはなんなのだろう？」という問いを立て、それをファンクションの変化であるとする[117]。「文学のエボリューションについて」においても手紙や新聞という形式に関しては同様に触れられているが、「文学的ファクト」においては括弧内でごく簡単に触れられた雄弁術のくだりが[118]、「文学のエボリューションについて」では、ことばのファンクションとの相関関係を示す事例として前景化されていることが、そのことを具体的に示している[119]。

113　ハンゼン＝レーヴェは、トゥイニャーノフにおいてドミナントの交替が文学のエボリューションであり、そのドミナントの交替はエポック＝システムとの関係によって定まるとしている（Aage A. Hansen-Löve, *“Доминанта,” Russian Literature* XIX (1986), p. 171.）。この解釈は、ドミナントがエポックによって規定されるという階層性を導入することとなり、「ファンクション＝機能」となりかねない。このとき彼は、「文学」のメタレベルにある「外部」を措定してしまうことになり、トゥイニャーノフがブィトを取り込みながらも（＝ литературный факт）、あくまで内在的に「文学のエボリューション」を考察した事実を覆ってしまう。

114　ПИЛК. С. 261-262.

115　例えば「システムとしての文学作品におけるそれぞれの要素の、他の諸要素との、従って、全システムとの相関関係［соотнесенность］を私は、その要素の構成的**ファンクション**と呼んでいる」（ПИЛК. С. 272.）。また、このことはスタイナーも指摘している（スタイナー『ロシア・フォルマリズム』124 頁）。

116　ПИЛК. С. 264.

117　ПИЛК. С. 274.

118　「この［構成原理が構成要因と従属的要因を規定する］際、構成原理の中に、何らかの用途、あるいは構成の使用へのある**志向**が入りうる。極めて単純な例としては、雄弁術的なことば、あるいはさらに雄弁術的な叙情詩の構成的原理の中へ、言葉の**発話**への志向が入っていることなど」（ПИЛК. С. 261.）。

119　ПИЛК. С. 278-279. 「文学的ファクト」におけるロモノーソフに関する分析は、「疎遠な観念の結合」という側面が論じられていた（ПИЛК. С. 264.）。付言するならば、「疎遠な観念の結合」も「雄弁術ジャンルへの志向」も、1922 年付けの論文「雄弁術のジャンルとしてのオード」において検討されている。

「文学的ファクト」と「文学のエボリューションについて」との間にあるこれらの相違が示しているのは、トゥイニャーノフが「文学史」を主題化するにあたって、すなわち、（エボリューションのメカニズムである）「システムの交替」を基盤にした「史」を構築するにあたって、基本的に交替図式を保持しながらも、自らの概念系を作り替えたことである。オートファンクション／シンファンクションの発想と同様に、ここでも「ファンクション」によってそれまでの諸概念全体を通分し、一元化して捉えようとしたことが確認できる。上でも引用したように、構成的ファンクション、文学的ファンクション、ことばのファンクションという三つの様相を設定し、作品内の所与の要素あるいは所与の文学作品がもち得るファンクションとして分類したことも、彼の意向である一元化のあらわれであるといえる。また、そのような相においてこそ、トゥイニャーノフの言葉「文学のエボリューションの主要な概念であるのは、諸システムの**システム**であり……」[120]を理解しなければならない。つまり、複数のシステムを孤立させるのではなく、それらのシステムを諸ファンクションの相で考慮すること（＝一元化）である。そして重要なのは、これらのファンクションは、目的論を前提とするようなヒエラルキーを構成するわけでは決してないということだ。

「ファンクション」を設定することによってトゥイニャーノフは、メドヴェジェフ／バフチンが批判するところの「自動化－感知可能性」という図式を乗り越えようとした[121]。というのは、「文学的ファクト」においてトゥイニャーノフは、まだ「自動化－感知可能性」という図式に則って、「われわれは、あらゆる時代の人々と同様に、《新しい》と《素晴らしい》とを等号で結ぶ。そして、全ての詩人が《素晴らしく》書く時、天才的になるのは《下手な》詩人である、そんな時代がしばしば起こる。《あり得ない》、受け入れ難いネクラーソフの形式、彼の《粗野な》詩は、自動化された詩をずらし、**新し**かったので、素晴らしかったのだ」[122]と述べることができる。しかし、「ファンクション」を導入し、文学史を主題的に採り上げた彼は、既に「自動化－異化」の二項対立的な交替図式に満足することはできないはずだ。「文学的ファクト」に比して、「文学のエボリューションについて」においては「新しい」という形容詞が圧倒的に少ないことが、そのことを端的に物語っている。

そしてここで、『ロシアの散文』の序文や「文学のエボリューションについて」で前景化している概念「差異［дифференция］」について述べなければならない。作品内におけるドミナントについて述べた後、トゥイニャーノフは「エボリューションの観点から言って、もう一つ興味深いファクトがある。それは、ただその作品が拡がっている文学系に対しての《逸脱》や《差異［дифференция］》に依って、作品は何らかの文学系に対して相関しているということである」としている[123]。ここでは、異化の同義語として用いられている

120　ПИЛК. С. 272. またトゥイニャーノフは「システムの歴史も、まず何よりもシステムである」とも述べている（ПИЛК. С. 282.）。

121　トゥイニャーノフが具体的にバフチンを念頭においていたとは考えられないが、1928 年 11 月 15 日付のトゥイニャーノフへのシクロフスキイの書簡には、「メドヴェジェフの本『文芸学における形式的方法』、社会学的詩学への批判的入門が出た」とある（Из переписки Ю. Тынянова. С. 192.）。

122　ПИЛК. С. 259.

123　ПИЛК. С. 277.

「逸脱」と、「差異」が並べられていることからも明らかなように、トゥイニャーノフは「異化」を「差異」として捉えている。これも、「異化」をより一般化するための、トゥイニャーノフによる概念の作り替えといえよう。同時に指摘しておかなければならないのは、「差異」を介してのみ、文学作品が文学系に相関すると明言されていることである。また、詩と散文の関係を論じるくだりでは、「しかし散文は差異化され、エボリューションし、同時に詩もエボリューションする」[124]と述べられる。われわれが注目したいのは、差異化とエボリューションが並置されていることである。その意味で、「差異」もまたトゥイニャーノフが文学史を構築するための理論的基盤となる。

(3)「文学のエボリューション」としての「文学史」に寄せて

しかし、正直にいわなければならない。トゥイニャーノフは、文学のエボリューションとしての文学史を構築するための理論的基盤を整え、それ以前の活動において具体的な事例を検証し提示しているものの、それは、いわゆる「文学史」の体を成していない。「最終的に学問となるためには、文学史は確実性を要求しなければならない。再考に付せられなければならないのは、全てのその用語であり、何よりも「文学史」という用語そのものである」[125]としたトゥイニャーノフにとってそれは当然の帰結なのかもしれない。しかしわれわれは、「資料（ドキュメント）が終わっているところで、書き始める」彼にならって、「文学のエボリューション」のメカニズムが導く「文学史の時間」を考察していかなければならない。

トゥイニャーノフは、「文学のエボリューションは、他の文化諸系と同様に、それが相関状態にある他の諸系とは、テンポに関しても、(エボリューションが用いている素材の特殊性ゆえに)特徴に関しても一致していない」と、そして「構成的ファンクションのエボリューションは速やかに起こる。文学的ファンクションのエボリューションはあるエポックから別のエポックへと起き、隣り合う諸系に対する文学系全体のファンクションのエボリューションは数世紀をかけて起こる」[126]と述べている。前者においては、具体的に反映論的な文学史観が批判され、後者においては、それぞれのエボリューションの異なるテンポが設定されることにより、均質的な時間が否定される。

一方、あらかじめ共時態と通時態を措定し、それらを統合するという方法を、彼は採らない。それは、「不断にエボリューションする共時的システムという概念そのものが矛盾である」とするトゥイニャーノフが、「作品は共時的文学システムに入り、そこでファンクションが《追加される》というような形で、文学的諸現象の相関関係が起きるという観念は、あまり正しくない」と続けて述べることから明らかだ[127]。また、「文学のエボリューションについて」の準備段階で残されたメモからも、そのことはよくわかる。

> エボリューションと共時的システムとの対立は偽りである。というのは、(相関関係としての)共時的システムは、ただ差異性［дифференциальность］を基本的特徴にしてこそ存在しているのであり、従って、エボリューションは、毎日起こっているのだ。それぞれ“新しい”作品、

124　ПИЛК. С. 276.
125　ПИЛК. С. 271.
126　ПИЛК. С. 277.
127　Там же.

それぞれ“新しい”章などなどである。相違［разница］の全ては、何がエボリューションするのかということにある。形式的諸要素のエボリューションは、ファンクションのエボリューションである。(128)

「不断にエボリューションする共時的システムという概念そのものが矛盾である」、「エボリューションと共時的システムとの対立は偽りである」、これら表明はすぐさまわれわれに、「文学研究および言語研究の諸問題」のテーゼを想起させる。「共時態と通時態という対立は、システムという概念とエボリューションという概念の対立であったのであり、原理的な本質性を失っている。というのは、システムそれぞれは必ずエボリューションとして与えられているのであって、一方、エボリューションはシステム的性質を不可避に帯びているからだ」(129)。しかし、ヤコブソンによる通時態を共時態に統合するという発想を確認したわれわれは、このテーゼを同様の発想のもとに理解し、翻ってトゥイニャーノフの「矛盾」、「偽り」を解釈することは、避けねばならない。「エボリューションは、毎日起こっている」という言説は、なるほど平板なものである。しかしここでも、「毎日起こっている」エボリューションが、「ファンクションのエボリューション」として明言されていることを確認すれば、「文学のエボリューションについて」で為された「ファンクション」の導入による概念系の編成が、何よりもこの「毎日起こっている」エボリューションを解明する為に要請されたものであったと言い得るのではないか。

つまり、われわれがここまで検討してきた「ファンクション」、「文学のエボリューションについて」で明確に提示されたそのコンセプトは、共時的な示差的体系におけるファンクションというよりはむしろ、「通時的」と名付けられてしまうような要素を、それを介することにより、文学史固有の時間を生成させる可能性を与えるファンクションである。もしそうでないなら、「文学は時間外的」であるとみなすに止め、「自動化－異化」の交替図式を越え出る必要はトゥイニャーノフにはなかったはずだ。「オートファンクション／シンファンクション」を、「外部／内部それぞれの相関」として解釈し、二項対立としての「新しい／古い」をより一般化したものとして「差異」を提示したわれわれは、「自動化－異化」が孕んでしまい、あたかもそれが「史」を構成してしまうかのような「時間」を如何に克服するか、トゥイニャーノフの「文学のエボリューション」のメカニズムを、如何に「文学史」として成立させるかという問いを引き受け、そして、そのときあらわれるものを見極めなければならない。

新しい／古いが一義的であるような時間性の超克という観点から言えば、「差異」を介して文学作品が文学系に相関するということは、トゥイニャーノフにとって、「差異」があるから「新しい」ということであって、それは、「新しい」ものは「差異的」であるが、「差異的」なものが「新しい」とは限らないということである。通常の観念に従えば、「古い」は時間的に先行し、「新しい」は時間的に後続するものであるわけだが、その意味で「自動化－異化」の交替図式は、その交替の連続によって「文学史」が編まれるという観念をもたらす。しかし、ここには時間に関して矛盾する二つの認識が共存している。というのは、

128　ПИЛК. С. 523.
129　ПИЛК. С. 283.

「新しい／古い」という関係性は、相互に支え合ってのみ成立する概念であるから（トゥイニャーノフの論文集のタイトルを、『擬古主義者＝革新者』とすることをシクロフスキイが勧めていたことを思い出そう）、常に同時的・無時間的であるはずであり（シクロフスキイのいうところの「原因と結果の同時性」、メドヴェジェフ／バフチンのいうところの「永遠の現在」、「永遠の同時代性」）、それを「古いから新しいへ」と連続的に流れる時間＝歴史として重ねていくことはできないはずだ（トゥイニャーノフが「不断にエボリューションする共時的システムという概念そのものが矛盾である」と述べていたことを思い出そう）。この通常の観念に従ってエボリューションを捉えようとするなら、ヤコブソンが行ったように、「変異」の前後を切断し、目的論的にその「変異」を解釈するしかない。

また、差異的ではあるけれど、「新しい／古い」という二項対立には通常属さない「差異」を挙げることは可能だ。それは、トゥイニャーノフが執拗に指摘していた問題の一つ「偶然性」である。典型的な例を「文学的ファクト」から引こう[130]。「［偶然の結果である］この《未完結性》や《断片性》は、当然のことながら、間違いやシステムからの脱落として知覚されるだろうが、ただそのシステムそのものが自動化される時に、それを背景としてこの間違いが新しい構成原理として立ち現れるのである」[131]。「偶然性」はまず、「間違い」や「脱落」として認識されるのであり、「新しい」と認識されるではない。つまり、「差異」は常に「新しい」わけではない。そのような「偶然性」をエボリューションの重要な契機と捉えるトゥイニャーノフは、それがエボリューションの契機と捉えられるための時間（この引用の場合は、そのシステムの自動化）を必要とせざるを得ない。

このような、一見、些末に思えるかもしれない「新しい／古い」に関する認識の機微は、彼が文学研究における観察者の立場を重視していたこととも連関している[132]。「文学的諸現象の相関関係の外部では、それらの観察も発生していない」[133]と考えるトゥイニャーノフにとって、同時代の文学を論じるのはひじょうに困難であった[134]。加えて、「［文学理論の］用語は具体的であり、文学的ファクトそのものがエボリューションしているように、その定義はエボリューションしている」[135]という言葉を考慮するならば、（文学作品

130　その他には、例えば「ついでにいえば、《創作の意図》に対する《偶然性》という概念は、文学のシステムにおいてはまったく偶然でないことが明らかである」（ПИЛК. С. 228.）、「文学において**偶然的諸結果**も固定される」（ПИЛК. С. 279.）、「そこで**偶然的なもの**がフレーブニコフにとって芸術の主要なエレメントとなった。／そのようなことは学問においてもしばしば起こっている。古い学者たちによって、不完全な実験の為に引き起こされる偏差として説明される小さな間違い、《偶然性》は、新しい発見の刺激となっている」（*Тынянов Ю.* О Хлебникове // *Тынянов.* Архаисты и новаторы. Л.: Прибой, 1929. С. 588.）など。

131　ПИЛК. С. 263.

132　トゥイニャーノフにおける「起源」と「エボリューション」という問題の立て方に対して注釈者たちは、「文芸学において、研究者の《観察点》（視点）の意義を、文学史研究のタイプそのものを条件付け、その結果に影響を与える要因として理解したのは彼が初めてではないだろうか」と述べている（ПИЛК. С. 526.）。

133　ПИЛК. С. 276.

134　例えば、ドストエフスキイが、新しい言葉を発見したのは自分やトルストイやトゥルゲーネフではなく、プーシキンでありゴーゴリであると述べていることに対し、「同時代人にとって同時代の大きさに気付くことは難しいし、その中に新しい言葉を見つけることはより困難だ」とトゥイニャーノフは述べている（*Тынянов.* О Хлебникове. С. 584.）。

135　ПИЛК. С. 270.

だけではなく）彼の文学研究への眼差しに関しても、トゥイニャーノフの場合は明らかに内部観測者のそれである[136]。内部観測者にとって「時間」は、絶対的・均質的にあらわれることはない。

これらのことから導かれる帰結は、トゥイニャーノフの理論に則るとするならば、文学系における「差異」こそがそのシステムにおける「史的時間」をもたらすということだ。そのような「史的時間」は、「差異」から事後的に構築されるしかない。これは、「異化」にはじまって「自動化」に終わる、そんな経過する時間でのことではない。それ故、トゥイニャーノフにとって文学のエボリューションは、直線的な時間観を前提とすることのない、ファンクション＝差異（化）の運動として捉えられざるをえない。しかも、そこで観察される「史的時間」とは「差異」を観察することによって初めて見出される時間なのである。彼にとっての文学のエボリューション＝文学史は、このような時間のもとで成立する。彼の「文学史」に見られる内在化・一元化は、史的時間をもシステム間（＝内）の「差異」を媒介にすることによってのみ見出される要素とする、徹底的なものなのである。

まとめよう。トゥイニャーノフにとって「文学史」を構築することは、文学のエボリューションのメカニズムである「システムの交替」をファンクションの相で捉え、記述することであった。トゥイニャーノフにおけるこの「ファンクション」は、（全てではないにしても）「機能」ではなく「関係性」のニュアンスで理解されるべきであり、あるいは、「機能」という言葉を残すなら「～に対する機能」ではなく、「～における機能」と捉えられるべきである。なぜならば、トゥイニャーノフはこの概念によって「交替」をより一般化し、「自動化－異化」が孕んでしまうような皮相な時間を克服しようとしたといえるからだ。そして、この克服こそが彼に「史」の可能性を拓いたのだと、われわれは考える。それは、文学系に対するある作品の「差異」を認識すること、その「差異」を「新しい／古い」には還元しないこと、そして、そのような「差異」を一義的に捉え、それを媒介にすることによってこそ、文学史固有の時間は見出され、「史」を紡ぐ可能性が現れるということである。

繰り返すが、例えば「新しい／古い」という「差異」をわれわれが認識する時、初めに知覚するのは「差異」であって、「新しい／古い」という時間的前後関係ではない。それは事後的に見出されるに過ぎない。付言すれば、функция が（「関係」ではなく）何らかの「機能」として見出されるのも事後的な観察によってのみであり、彼の理論が孕む事後的性格を把握することによって、функция が曖昧さを有してしまう事態も理解できよう。そして、この事後性はトゥイニャーノフの「システム」の在り方にも関わっている。トゥイニャーノフが「何らかの文学系との不一致が鋭ければ鋭いほど、不一致や差異が基づい

136 トゥイニャーノフをシステム論的に読解する試みの一つとして、*Марков В.* Тынянов и современная системология // Тыняновский сборник: Вторые Тыняновские чтения. Рига: Зинатне, 1986. が挙げられる。彼はトゥイニャーノフの「相対主義」を重視しているが、内部観測的な視座の可能性を引き出しているとはいえない。それ故、トゥイニャーノフの「文学のエボリューション」を樹木のメタファで語ること（トゥイニャーノフ自身が語っている）、すなわち自己組織化論との類似を指摘するに止まっている。なお、フォルマリストによる「エボリューション」に関するメタファについては、以下に詳しい。*Гудков Л.* Понятие и метафоры истории у Тынянова и опоязовцев // Тыняновский сборник: Третьи Тыняновские чтения. Рига: Зинатне, 1988.

ているそのシステムこそがより強調される」[137]と述べているように、「不一致」「差異」を介してこそ「システム」が感得されるのだ。確かにこれは、上で見てきたヤコブソンの「変異」に似ているかもしれない。しかし、トゥイニャーノフの提唱する「システム」はより慎重である。「この基礎的な問題を分析するために、以下のことをあらかじめ取り決める必要がある。すなわち、文学作品はシステムであり、また文学はシステムであるということだ。こうした基礎的な取り決めがあってはじめて、諸現象や諸系の様々なカオスを観察するのではなく、それらを研究する、学問としての文学の構築が可能なのである。文学的エボリューションにおける隣接する諸系の役割の問題は、これによって排除されるのではなく、立てられる」[138]という言葉からも明らかなように、彼は決してシステムを実体化しているわけではない。トゥイニャーノフは、「ファンクション」で一元化することによって「差異」を導き、そこから翻って「史」を紡ぐ。彼が、「古典主義／ロマン主義」という対立に代えて、「擬古主義」を軸に、1800-1830 年代前半の文学状況を素描する試みは[139]、新たな「差異」を見出すことによって、新たな「史」を紡ぐことであったともいえる。

おわりに

彼の「時間」を素朴に考えれば、徹底的に「現在」を中心に展開されるものであるといえる。それは、「文学のエボリューションについて」に至るまでの段階で、変化を「時間外」の「純粋な運動」と捉えていることからも明らかであろう[140]。「運動」を「時間内」で捉えるということは、ニュートン物理学的な均質で等価的な時間を前提とし、（「運動」の側からではなく）その前提とした認識論的マトリクスから「運動」を捉えることを意味する。トゥイニャーノフはそのことをまず、批判したといえる。

しかし、トゥイニャーノフは「文学のエボリューション」を主題化することによって、どうしても「史的時間」を考えなければならなかった。歴史に回帰して、共時を支える通時を再発見するのでもなければ、その対象に固有の時間を措定しつつも一般的な「時間」を環境として保持するのでもなく、トゥイニャーノフは、文学史固有の時間を構築しようとした。というより精確には、文学のエボリューションのメカニズムから文学史を考察したとき、そこにあらわれたのが、差異を介した観察によって見出される、文学史固有の時間なのである。それは、（アプリオリな直観形式としてではなく）「矛盾」を解消するために導入された「時間」であるといってもよい。

更にそのような「史的時間」を発見することでトゥイニャーノフは、素朴な現在中心主義も脱していると考えられる。研究者すらもエポック＝システムに規定されていることを自覚するトゥイニャーノフは、現在をも相対化する（不）可能性の視座に立っているといえる。それは、（過去として見出されるであろう）複数の現在を正当化することであり、トゥイニャーノフが向けた、キュヘリベーケルやフヴォストフなどマイナーな作家への眼差し

137　ПИЛК. С. 277-278.
138　ПИЛК. С. 272.
139　*Тынянов Ю.* Архаисты и Пушкин // Архаисты и новаторы.
140　*Тынянов.* Проблема стихотворного языка. С. 34.

が、実践的にこの認識を示しているのだろう。そしてまた、このような視点から、作家としてのトゥイニャーノフ、彼の歴史小説を見直すことができるかもしれない。

イデオロギーとしての近代の産物として語られる、いわゆる国民文学史とは異なる視座からトゥイニャーノフは文学史を構築しようとした。もちろん、そのようなイデオロギーから彼が自由であったと言いたいわけではない。ただ、現代において、いわゆる国民文学史が構築主義的に語られるとしても、文学史自体の必要性がないわけではないと、論者は考える。それは、決して文学史に限定される問題なだけではなく、当然、われわれが同時代の文学作品をいかに評価すべきかという問題に関わってくる。全てが許されるような現代における文学環境、そしてある種の学問的なニヒリズムを克服するためにも、トゥイニャーノフの文学史理論は、現代においてもなお示唆的であるといえよう。

Пересмотр теории «истории литературы» Ю. Тынянова

Яги Наото

Известно, что во второй половине 1920-х годов опоязовцы — В. Шкловский, Б. Эйхенбаум и Ю. Тынянов, исходя из имманентного анализа отдельного литературного произведения, стремились к изучению социологии литературы. Однако, по нашему мнению, это не «отступничество». «Социология литературы» опоязовцев тесно связана с их взглядами на «историю литературы» как на «эволюцию литературы». Тем не менее, нам совсем недостаточно сделать такой вывод, что их изучение «внелитературного» логически необходимо для их имманентного «формального метода». Важнее, что в методах исследования отношения литературы к внелитературному между опоязовцами существует разница. Таким образом, в данной работе сначала мы подтверждаем, что их «социология литературы» вытекает из теоретической проблемы истории литературы. Затем мы рассмотрим различие между триумвиратом в теории «истории литературы = социологии литературы = изучение внелитературного». В этом, например, нам симптоматично сопоставить концепцию Эйхенбаума «литературный быт» с концепцией Тынянова «литературный факт». Концепция «литературный быт» определяет быт, который влияет на литературу извне, как среду, обусловливающую литературное произведение, Концепция «литературный факт» же обозначает такой быт, который входит в литературу и, можно сказать, выбран самой литературой как системой. Одним словом, разница между этими концепциями сводится к разнонаправленным точкам зрения — Эйхенбаум рассматривает литературное произведение с точка зрения (литературного) быта, а Тынянов — наоборот. Здесь нельзя упускать из виду эту тонкую, но существенную разницу. Следовательно, концепция «литературный быт», созданная Эйхенбаумом для изучения истории литературы = социологии литературы, не может достичь собственного времени истории литературы. Суть данной работы состоит в том, что мы представляем оригинальное время истории литературы Тынянова, которое он открывает в процессе того, что он обрабатывает свою теорию литературной эволюции.

Для того, чтобы понять актуальность тыняновской концепции литературной эволюции, мы должны учесть еще одну проблему, которая на переднем плане выступает после Ф. де Соссюра — противопоставление диахронии и синхронии. М. Бахтин осуждает «формалистов» за отсутствие категории «исторического времени» в их истории литературы («Формальный метод в литературоведении»). Дальнейший переход Бахтина к исторической поэтике свидетельствует о том, что по его мнению синхрония опирается на диахронию. Между тем, концепция эволюции языка Р. Якобсона, приводящего плоды «русского формализма» к пражскому лингвистическому кружку и французскому структурализму и определяющего синхронию в качестве динамики против де Соссюра, заключается в том, что диахрония присоединяется к синхронии. Очевидно, что и Бахтин, и Якобсон размышляют лишь в рамках противопоставления диахронии и синхронии. В этом смысле тезис соавторства Тынянова и Якобсона «Проблемы изучения литературы и языка» вообще истолковывают под влиянием идей Якобсона. А нам надо показать, что перед появлением этого тезиса Тынянов уже мыслит о литературной эволюции за пределами такого противопоставления.

В предлагаемой работе пересмотру подвергнуты статьи Тынянова по литературной эволюции, в частности, «Ода как ораторский жанр», «Литературный факт» и «О

литературной эволюции». При этом следует отметить не только сходство, но и разницу между этими статьями, которую часто выпускают из вида (прежде всего, необходимо отличать «О литературной эволюции» от «литературного факта»). Кажется, в «О литературной эволюции» Тынянов стремится унифицировать противопоставление «литературного» и «внелитературного» с помощью введения нового понятия «функции» в свою терминологию (нельзя не заметить, что тыняновская «функция» носит математическое значение). Это значит не только введение, но и перемещение всей терминологии Тынянова и ему позволяет наиболее генерализировать механизм смены на основе понятия «остранения» Шкловского на историко-литературном уровне, т.е., противопоставления «нового» и «старого» (см. «Архаисты и новаторы» Тынянова). В то же время на первом плане появляется понятие Тынянова «дифференция». Наконец, мы считаем, что Тынянов обретает специальное время истории литературы только через опосредствование дифференции.

Возможно, что эта стратегия Тынянова — последовательно оставаться внутри литературы, и потому он открывает «время истории литературы». Даже в настоящее время, когда интенсивно обсуждают об интердисциплине, стоит перечитывать Тынянова для того, чтобы реконструировать новую историю литературы и преодолеть своего рода научный нигилизм.